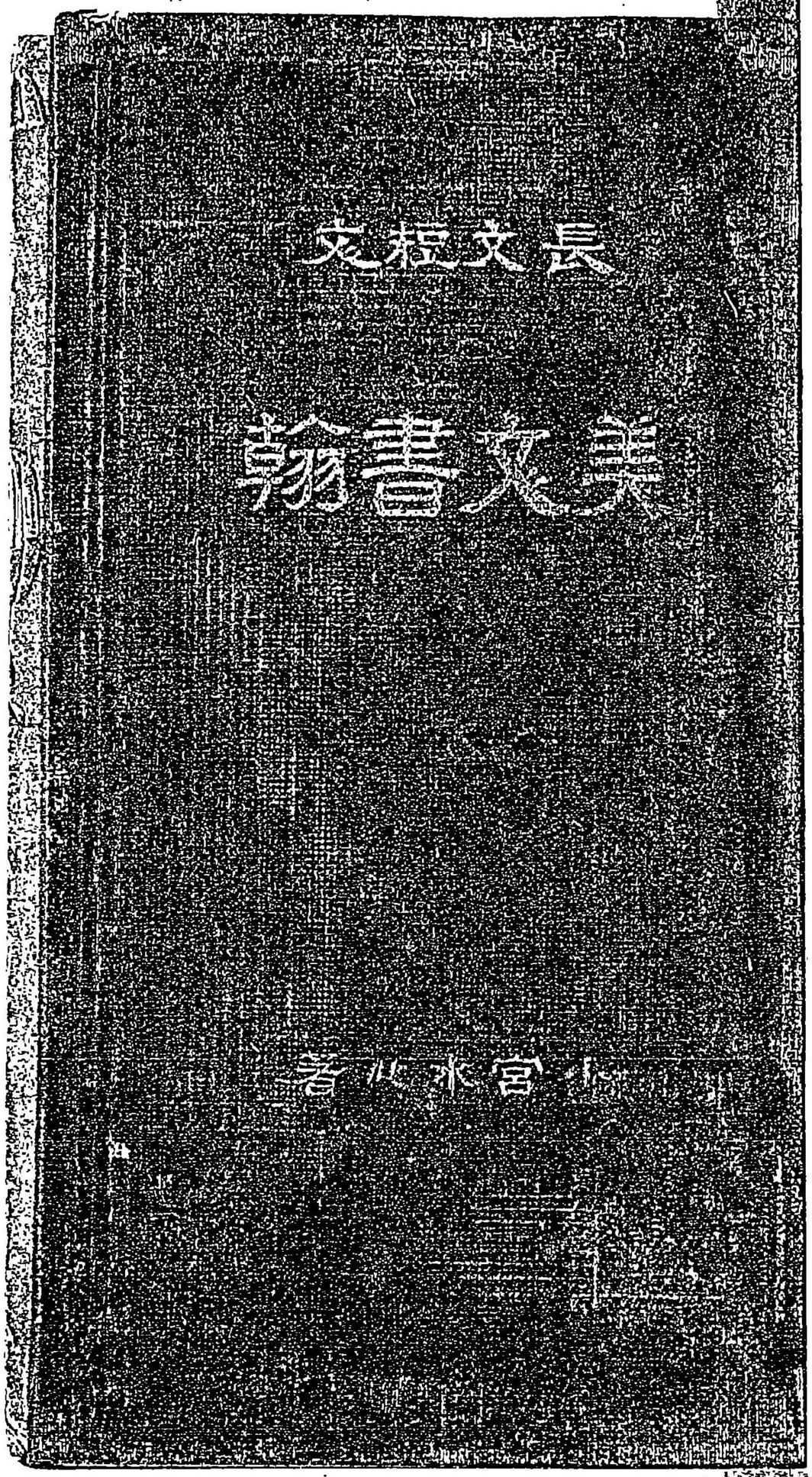


301305-001-2

特71-722

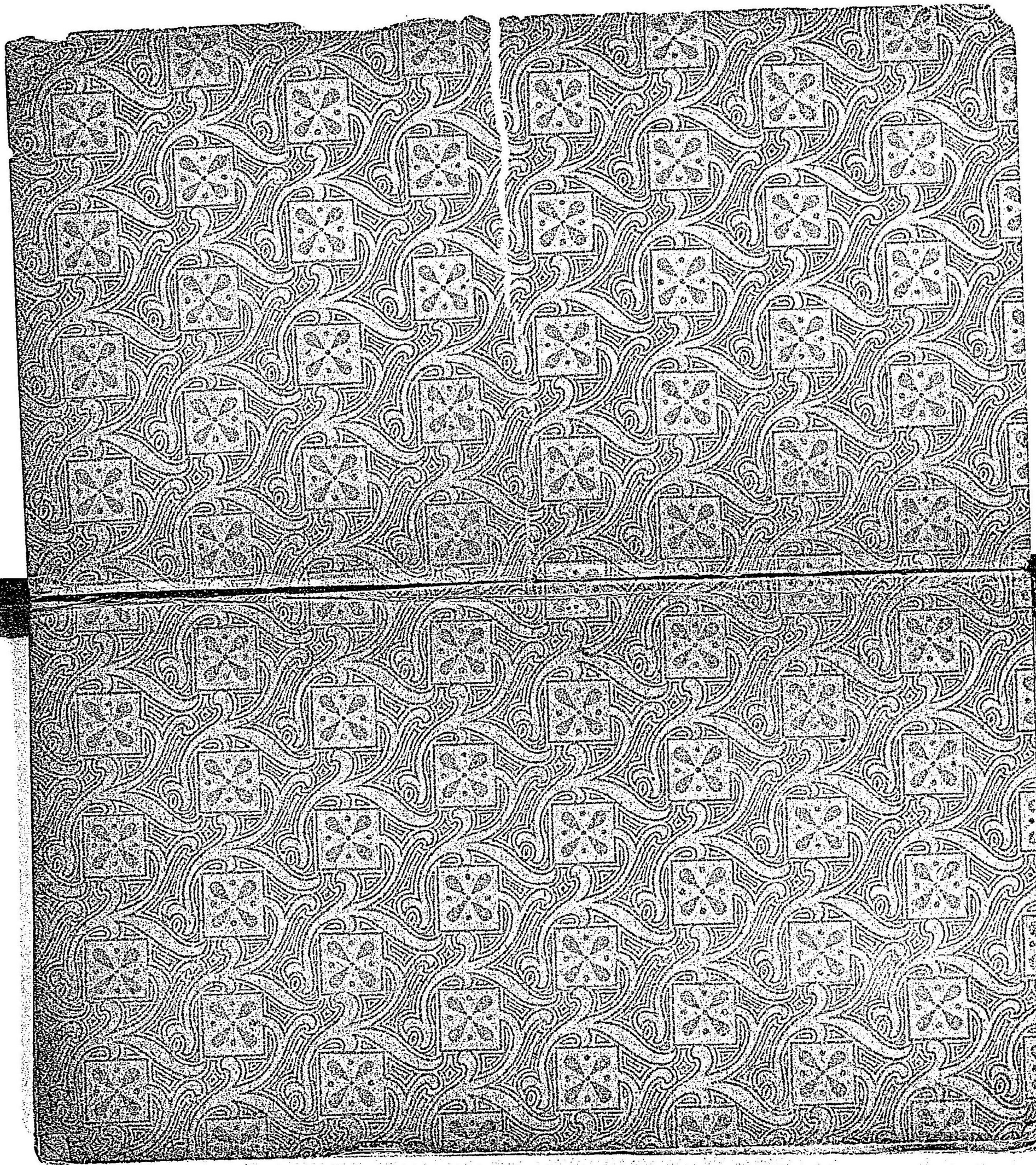
長文短文美文書翰

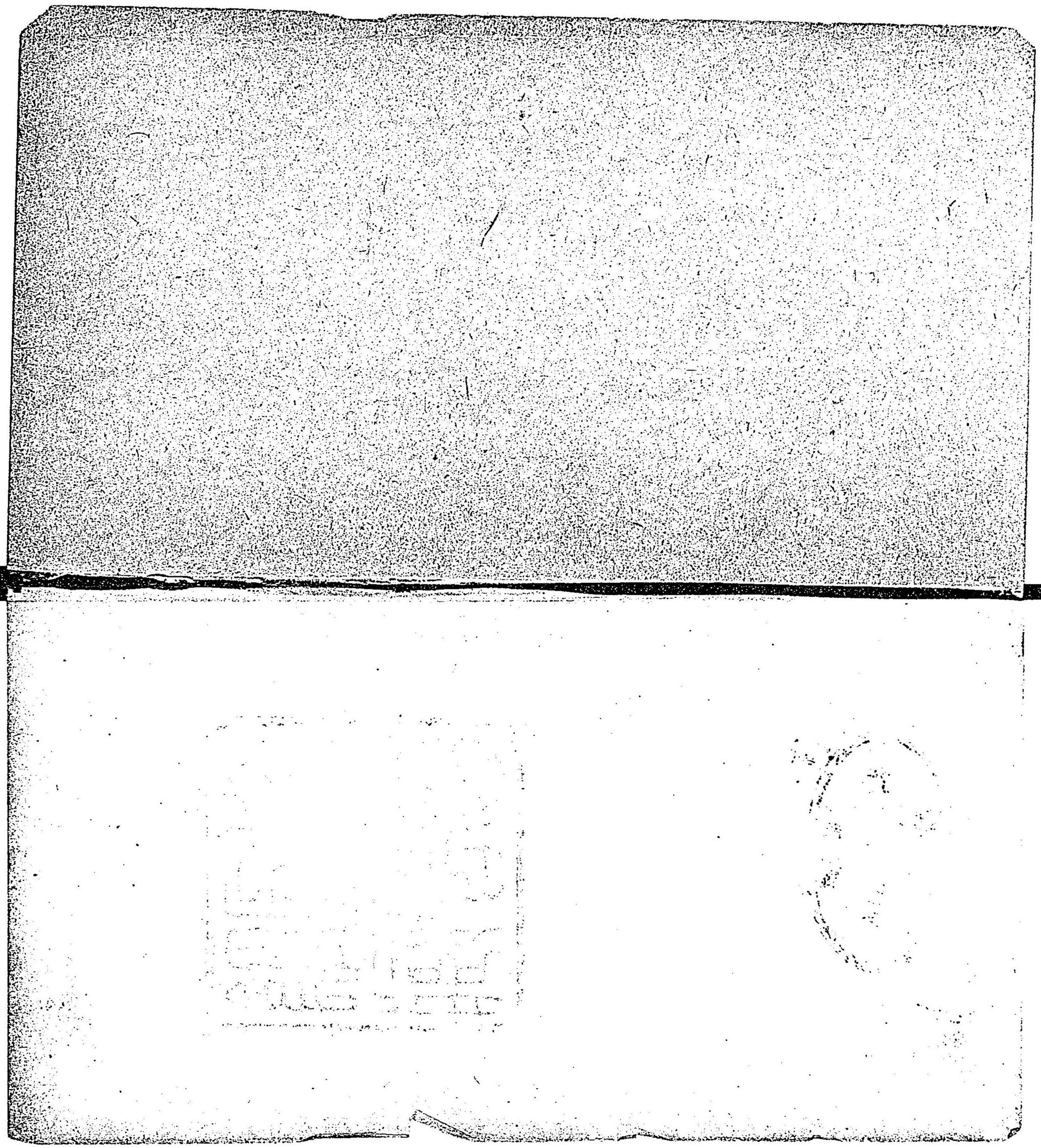
小宮　水心／著

M45.3

DAC-0001

孟子文選





特別
522

説文解字義證

段玉裁撰

45. 3. 12
内交

凡例

一　此一卷は、書翰文に於ける第十四回の著なり。その生命とも云ふべきは、同一の文題に對し、長文短文二章の例を示せるに在り、卷首に題せる一言を見ば、悟ること多かるべし。

二　長短二章の文例は、封書と葉書との別を立てしに非ずと雖も、短文は臨機彼是に應用すべきそ。又、發信者と受信者との身分尊卑の關係により、封書と葉書との別を立つるを要す。

三　同題に對し更に其一其二と區分し、幾章もの例を擧げたるは畢竟趣向に富み、且つ筆路に熟達せしめんが爲なり。繙くの際、心にて讀み奥齒にて嚙みしめ、其意の存する所を知れかし。

四　詞は最も風流典雅なるものを用ゐ、優美なる書翰文練習に供すると共に、美的記事文にも熟せしめん事を勉め置きたり。能く心して讀まば、一章毎に此實あるを會得すべし。

五　上欄なる書翰詞藻は、本欄の文題に對し、幾多の應用語を擧げたれども、固より十其三四のみ、著者も自ら不滿足とする點なるも作者にして巧妙に運用せば、効なきには非ざらん。

六　文題は數百を選びたるも、出帆間合、在宿通知の如き、本書の與り知らざる所、苟も他の叙景抒情、又は議論、風流を要すべき題は、勉めて漏さゞるを期したり。

明治四十五年二月

著者識

自叙に代へて

書翰は言語の代用たること論なし、朝夕に相見る能はざる千里の遠きに往復するのみならず、咫尺の間に住しても花紅葉の誘引には、殊更に書翰を用ゐる場合多し。一言にて掩はゞ書翰は、自己の代理をなし、商賣もすれば談判もし、情を寄せもし景をも知らせ、最も重寶なる職責を盡す。蓋し、其重寶なる實を擧ぐるには、順序として練習の必要條件を見る。又、必要條件たるを悟れ。

文章を作ると云へば、決して容易なる業にあらず、記事文然り、論説文然り、お伽噺も然り、書翰文は殊に然りとす。世に物の美事に、用事をすらく〳〵と書き流し得る人は、十中に果して幾人あるべき乎。著者は先づ其を問はんとするなり。風流なる事と俗事とを論ぜず、筆の意に隨はざるを遺憾と思はゞ、事實上に於て、練習の必要條件たるを悟れ。

入學を勸むるにも、卒業を賀するにも、不幸を慰問するにも、花見に誘ふにも、月見に招くにも、相思ふ友へ贈るにも、膝を接して談話するより、一枝の筆の力になれる、書翰ぞ床しくも嬉しう思はるゝものぞ。而も書翰には、誠意誠心自ら籠れり。人の誠意誠心は、拙なる文にもほの見ゆるものなれど、若し夫れ巧妙に書き成されんか、尙一層感じ深うなる道理と知らば、徹頭徹尾、練習の必要條件たるを忘るべからず。

詩や和歌や俳句に風韻を尙ぶが如く、書翰文にも亦之を尙ふ。風韻は讀者に感興を與ふる不思議なる力を有し、人を靈化せしむるもの。事件を辨ずるに止る實用一偏のみ、只事理明白を期して風韻に重きを置かずとするも思ひを雁に運ぶたより、又は花紅葉の旅には、何とて之を捨てゝ宜しかるべき。此風韻よ、美文書翰の生命とも云ふべきぞ。

世に書翰文の書多く、數へ盡すべくも有らざらん。唯其青年に適し、練習用に供して

遺憾なき乎と問はゞ、余は將に此書を以て返辭に代へんとす。蓋し、効用の事實に顯るゝと顯はれざるとは、作例の巧拙に關すべきも、抑も亦作る事の多少と、讀む事の精粗にも係らずんばあらざるなり。故に多讀、多作、多商量は、書翰文練習上に於ても亦、缺くべからざる必要條件と知れかし。

選出する所の文題は、必ずしも古きに遠ざからず。必ずしも新奇に偏せず要は現代青年に適切ならしめ、趣向は清新に、語句は美妙に、叙景にも抒情にも勉めて詩的に筆を執り、受信者に感興を喚起せしめんことを期したり。此書を師友として自修する人は、時に或は受信者となり、時に或は發信者となり、假設の文題に就き思想を練り、事理明白を要するものには、事理明白を一文の生命とすべく、風流典雅を要するものには、風流典雅を一文の生命とすべく、二者混同を許さず。

世人或は謂はん、此書實用に遠ざかること甚しと、固より今日、日用に行はるゝ所の

手紙、即ち實用には甚だ遠からん、又或は適せざらん。然れども、世人が實用に適するものは、其書汗牛充棟も啻ならずして、而も死したる文例と同一にして、應用の實を人に教ふるに乏し、此著は蓋し、縱横の筆致を養ふに資し、實用は之が熟達の後に待ちし也。

明治壬子紀元節

水心識

長文
短文
美文書翰

目次

卷首に一言……一

春季

年始狀……四
其一　故郷の友へ（都の友より）……四
同返辭　都の友へ（故郷の友より）……七
其二　都の兄へ（故郷の弟より）……一〇
同返辭　故郷の弟へ（都の兄より）……一三
其三　山村の友へ（海村の友より）……一五
同返辭　梅村の友へ（山村の友より）……一七
新年の小集に招く……一九
同返辭……二一
故郷の友へ初だより……二三
歌留多會……二五
其一　開催の檄……二五
同返辭……二六
其二　友を誘ふ……二八
同返辭……三〇
其三　戰場より……三二

同返辭……三三
早春出遊に誘ふ……三五
同返辭……三六
春寒の頃老人に……三八
同返辭……四〇
友に餘寒見舞……四二
同返辭……四四
探梅歸後友に……四五
同返辭……四七
梅信は如何に……四九
同返辭……五一
梅花に添へて……五三
梅花を惠まれし禮……五四
觀梅に請ず……五六
同返辭……五七
梅見に招かれし禮……五九
梅は見頃に候ぞ……六〇
觀梅は如何に……六三
其一　名所のに……六三
其二　吾が里のに……六四
同返辭……六六
其一　名所への返し……六六

其二　吾が里への返し……六七
梅見の旅する友に……六九
香世界より一筆……七一
旅より一筆……七三
桃は咲かずや……七五
同返辭……七六
桃は咲けり……七八
夜櫻だより……八〇
花だより……八二
其一　名所の……八二
其二　吾が里の……八四
櫻狩に行かばや……八六
同返辭……八七
花見の旅する友に……八八
其一　京都に……八九
其二　芳野に……九一
舟行に誘ふ……九三
同返辭……九五
山行に誘ふ……九七
同返辭……九九
野遊に誘ふ……一〇一
同返辭……一〇三

花見に請ず……一〇五
同返辭……一〇六
花下の吟筵より一筆……一〇八
同返辭……一〇九
君來ずや……一一一
其一　町の友へ村の友より……一一二
同返辭　村の友へ町の友より……一一三
其二　山の友へ海の友より……一一五
同返辭　海の友へ山の友より……一一七
彌生の頃都の友へ……一一九
同返辭……一二三
牡丹の頃友に……一二五
晩春の頃旅の友に……一二七
同返辭……一二九

夏季

首夏の贈答……一三三
其一　都の友へ故郷の友より……一三三
同返辭故郷の友へ都の友より……一三五
其二　山村の友へ海河の友より……一三七
同返辭　海村の友へ山村の友より……一三九
其三　旅中より一筆……一四一

藤の宿より……一四三
同返辭……一四四
小集に請ず……一四五
同返辭……一四六
新緑の村より……一四七
同返辭……一四九
杜宇の名所より……一五一
同返辭……一五三
端午に招く……一五五
梅雨だより……一五六
其一　都の友へ故郷の友より……一五六
同返辭　故郷の友へ都の友より……一五九
其二　近き友に學友より……一六一
同返辭　學友へ近き友より……一六三
朝顔苗を乞ふ……一六四
同返辭……一六五
友への見舞……一六七
同返辭……一六八
螢狩は如何に……一七〇
同返辭……一七一
觀螢に招く……一七三
同返辭……一七五

螢籠に添へて……一七六
同返辭……一七八
朝顔咲く宿より……一八一
同返辭……一八二
朝顔自慢の一筆……一八五
同返辭……一八八
旅行に誘ふ……一八七
其一　川への旅行に……一八七
同返辭……一八九
其二　海への旅行に……一九一
同返辭……一九三
其三　山への旅行に……一九五
同返辭……一九七
避暑に誘ふ……一九八
其一　海村の避暑に……一九八
同返辭……二〇〇
其二　溪村の避暑に……二〇一
同返辭……二〇三
其三　村莊の避暑に……二〇五
同返辭……二〇六
其四　小島の避暑に……二〇七
同返辭……二〇八

納涼の舟浮けん……二〇九
其一　海に……二〇九
同返辭……二一一
其二　川に……二一一
同返辭……二一四
其三　湖に……二一五
同返辭……二一八
瀑見は如何に……二一八
其一　名所のに……二一八
同返辭……二一九
其二　村のに……二二一
同返辭……二二二
水亭に小集を催す……二二四
同返辭……二二五
海樓の納涼に招く……二二七
同返辭……二二八
旅行だより……二三一
其一　川へ旅行の……二三一
其二　海へ旅行の……二三四
其三　山へ旅行の……二三〇
避暑地より……二三三
其一　海村の……二三三

同返辭　町の友より……二四七
其二　溪村の……二五〇
同返辭　町の友より……二五四
都の友へ……二五五
同返辭……二五八
故郷の友へ……二五九
同返辭……二六三

秋季

初秋の贈答……二六五
其一　歸省中の友へ……二六五
同返辭……二六七
其二　避暑中の友へ……二六九
同返辭……二七一
其三　旅中より一筆……二七三
同返辭……二七五
其四　故郷の昨今を……二七七
同返辭……二七九
其五　轉地療養の友へ……二八一
同返辭……二八三
其六　町の友へ……二八五
同返辭……二八六

郊遊に誘ふ……二八七
同返辭……二八九
蟲籠に添へて……二九一
同返辭……二九二
夜會を催すに就き……二九四
同返辭……二九七
月見だより……二九九
其一　舟遊を催す……二九九
同返辭……三〇〇
其二　詩會を催す……三〇一
同返辭……三〇二
其三　友を招く……三〇三
同返辭……三〇五
其四　月見の席より……三〇六
同返辭……三〇七
其五　琵琶湖畔より……三〇八
同返辭……三一〇
其六　故郷より……三一一
同返辭……三一三
其七　湯崎より……三一四
同返辭……三一五
菊日和……三一七

其一　菊花に添へて……三二七
同返辭……三二八
其二　菊見に招く……三二九
同返辭……三三〇
其三　菊見に誘ふ……三三一
同返辭……三三三
秋雨友に寄す……三三三
同返辭……三三五
遠足せばや……三三七
同返辭……三三八
茸狩に請ず……三三九
同返辭……三三一
松茸を贈る……三三三
同返辭……三三三
鰯を贈る……三三四
同返辭……三三六
觀楓を催す……三三八
其一　牛瀧へ……三三八
同返辭……三三九
其二　三尾へ……三四〇
同返辭……三四二
其三　箕面へ……三四三

同返辭……三四五
紅葉の名所より……三四七
其一　牛瀧にて……三四七
其二　三尾にて……三五一
其三　嵐山にて……三六四
其四　箕面にて……三七二
其五　碓氷にて……三七七
其六　宮島にて……三七九
晩秋友に寄す……三二
其一　山村より……三八二
其二　江村より……三八四

冬季

初冬の頃都の友へ……三八五
同返辭……三八六
弔柿を贈る……三八七
同返辭……三八九
小春出遊を催す……三九〇
同返辭……三九一
入營せんとする友に……三九二
同返辭……三九四
雪合戰を催す……三九五

同返辭……三九六
雪見を催す……三九八
同返辭……三九九
嚴寒の頃友に……四〇〇
同返辭……四〇二
歳晩友に寄す……四〇三
同返辭……四〇五

雜

遊學する友に……四〇七
同返辭……四〇八
卒業を賀す……四一〇
其一　小學校の……四一〇
同返辭……四一一
其二　中學校の……四一三
同返辭……四一三
其三　商業學校の……四一四
同返辭……四一五
新築を祝す……四一六
其一　春季の……四一六
其二　夏季の……四一八
其三　秋季の……四一九
新築披露……四二〇
其一　春季の……四二〇
其二　夏季の……四二一
其三　秋季の……四二一
病氣全快を祝す……四二三
本復披露……四二五
就職を祝す……四二六
其一　會社員に……四二六
其二　小學教員に……四二八
其三　町村長に……四三〇
開業を祝す……四三一
其一　出版業の……四三一
其二　貿易業の……四三一
婚姻を賀す……四三二
其一　友人の……四三三
其二　知人の子の……四三四
結婚披露……四三六
出産を賀す……四三七
長壽を賀す……四三八
壽筵披露……四三九
作文書に添へて……四四〇
其一　書翰文……四四〇

同返辭……四四三
其二　記事文……四四五
同返辭……四四八
習字帖に添へて……四五〇
同返辭……四五三
寫眞帖に添へて……四五四
同返辭……四五七
紀念碑建設の相談……四六〇
同返辭……四六三
著作依頼……四六四
上京希望の友へ……四六六
人の死を悼む……四六九
其一　親を喪ひしを……四六九
其二　子を喪ひしを……四七一
怠惰を戒しむ……四七三
學生遊學の件相談……四七五
神社改造の相談……四七七
道路改修の相談……四七九

目次（終）

書翰詞藻

長文短文 **美文書翰**

小宮水心著

詞藻に就き

詞は文中に言はんと思ふ趣向を、書きあらはす道具にして、積みに積んで終に文を成すものぞ。趣向を先とし、詞を後にする順序なり。

書翰詞藻　卷首に一言

卷首に一言

余、書翰文を物すること前後十三回、然るにても尚言ひ漏したる事多ければ、重ねて說く所あらんとす願くは聞けかし。

此度物せる十四回目の筆には、特に一文題に對して長文と短文との二樣に書き分けたり。事實に千差萬

ろも、文章の上に於ては、前後の別あるも甲乙の差あるべきに非ずも而も詞悪しくば趣向をあらはす能はず文章の上に取りては、道具たるべき詞は、重大なる役目を帯ぶるものとも云ふべきぞ。此上欄に擧げし別ある書翰、此を長文にせよ、彼を短文にせよ、と豫め示さるべきに非ず。其長かるべくして長きは、十尋百尋に及ぶも厭はず、尚ぶ所は意を盡し用を達するに在るなり。其短かるべくして短きは、三四行にても可なり。出來得べくは三四字にしても亦可なり。戒しむべきは、短簡にして意を盡し用を達し得べきを、殊更に無益なる筆を弄し、浮遊の文句を驅り立てゝ長文にするの弊なり、此弊には、美文風を尚ぶもの最も陥り易し。長文に物せずば、詩的感情に訴ふるに足らずとするも誤解にて、詩的微妙の感は、寧ろ短文の中に存し、腕冴えし人の筆には、一

各題に對する詞藻は固より十分と言ひがたきも、作者靈妙なる應用を待たば、相當の役を勤むべく、能く讀まば、句は拙なるも往々名句を呼ぶの媒介となるべきを信ず。又、往々にして趣向の中心ともなるべし。

字一句にして此妙を發揮し得べし。只何事も稽古の結果と知り、蒔かぬ種は生えぬものと悟るがよし、とは余が曾て言ひし所の語なり。

今、一文題に對して、長文と短文との二樣に書き分けたる、前論と聊か撞着の誹を免れざらんも、其趣向の如何により、長くも短くも書かれ、而も意を達し用を辨ずるの點は、同一の結果を收むる事を得べきぞ。其長文は封書に、其短文は葉書にも應用し得べきぞ。故に長短二樣の文例は、趣向の一二に止まらぬ事をも知るに足り、又手紙と葉書文との稽古の料ともなるべし。讀者は、此意を悟るを要す。

年始狀

其一　都の新年

紫雲九重の空は棚引きて朝日麗かに。

○九陌に行交ふ車馬のひゞき、今朝は何となう床しく。

○迎へしは都の初正月、いとゞ珍しく先擧げしは三杯の屠蘇にて候

◎其一　故郷の友へ　都の友より

年たちかへる今日と申す今日はいと目出度候に分きて此處なる東京、九重の宮居に紫雲棚引き、朝日曈々と上り候へば、八百八町の家々の棟には、うね〳〵と甍の波光りて目ばゆく、初東風に飜る國旗の數は約四十萬、立つる門松には千古のみどりを籠めて壽色多く、百七十萬の居民、悉くみ代の春を迎ふ屠蘇酒に醉ふにて候。僕は怒濤吼ゆる小島に人と爲りし身の、去歳の夏遙に笈を負ひ、今し都の新年に遇ふ、一しほ感深きに候。

○此世は早くも新天地に入れるに候。

○金鷄三唱して世は清新の域に入り申して候。

○此處なる都は申すに及ばず、樺太さては臺灣、朝鮮のはてまでも。

○年立ちかへる空の景色、何となう麗かに、治まるみ代の。

さるにても、思ひ出づるは君が住み給ふ沖の小島の今日にて候よ、絶壁高う聳ゆる下には、新潮の氣濃かに薫じて太平の象溢れ、八重の汐路のはてより上る朝日の影麗かに、眠る鷗の夢穏かなる邊には、去歳の船一つ二つ往交ふべく、その白帆の金色に映ゆる樣も、君が遙拜岩の傍に立ちて東方を拜し給ふ樣も、目に歴々と浮び出で申して候、御得意の美文風の華墨、此七日には海山越えて吾が机上に落つべし、と屠蘇の酒杯手になしつゝ心に描き候へば、時間は八時過ぎて大路賑かに、大禮服に身を飾りし文武百官、思ひ〳〵に朝廷へ參賀のさま凛々しく、吾も他日は此内の一人かと、私かに微笑まれ申し候

○松竹の千代萬代、濱の眞砂の限なき御齡を重ねさせられ

○參朝の車の音も常よりも聞え候て。

○遙かに屠蘇の杯を擧げ、今年も亦相變らずにとの一語を呈し申し候。

○君には、定めてよき御年、筆萊小島に迎へさせられたるべ

又それと同時に、成功と不成功とは、勉不勉にある事を

も自覺致せるにて候ぞ。

目に映じ耳に觸るゝもの、殊に初春の都のさま、聞え

上げたきかず〳〵、此に盡くべくも候はねど、餘は何事

も梅や櫻の時節に讓り申すべく、先は新年の御祝詞まで

にと。謹言。

短文

僕は悉なく、五度目の春を東京に迎へ候が、君には如何なる年を、太古その儘の

村に重ね給ひし乎。承りたき事多き中にも其

が第一にて御座候、吳々も待たるゝは、勾ひ

床しき新年の御たよりにて候ぞや。敬白。

くと、賀し上げ候。

同 返事 島より

屠蘇の元氣に筆執り

給ひし都の御書。

○東の空より御賀狀今日と申す六日に拜見致し候。

○五十三驛の春經し華札、今朝小島なる吾手に落ち申して候

○腥き魚燈かきたて御書拜閲。

◎同 返辭 都の友へ 故郷の友より

長文

畏くも瑞雲棚引く千代田城のほとり、朝日まばゆき御書齋に筆執り給ひし勾ひ床しき元旦の華墨、四百里餘の海山越えて今日の七日に着、七種の粥啜り箸とめ其熱きが冷むるまで、幾度も繰返して拜見、東京の新年のさま、御書の表にあり〳〵と見れ、月は草より出で草に入ると詠まれし昔の武藏野、今は甍の波遙かに天に接し、東西南北山さへ見えで、湧くは萬民歡呼の聲のみと推するに難からざるに候。

此處島の正月、如何にと問ひ給ふか。御推量に少しも違はず、小島を打ち繞る絶壁には、荒れ狂ふ去歳の波穩

○小島の元旦には例の如く、新潮の香薫ずる磯に立ち、朝日拜し申して候。

○雪よりも白き砂濱に朝日の光りあび、聖壽萬歳を三呼致し次に君が前途を祝し申して候。

○都大路の繁華に引換へ、此處は靜かなる正月。

かに、治る御代のためしを示し、さらくと寄する紫紺の潮は奇しき香薫り、朝日は例により海の底より差上れるに候が、其餘光を浴びて遙拜岩の邊に立てるは即ち僕と思ひ給へや、影の一つなるは君伴はざるが爲にて候ぞ沖には白帆の二つ三つ、去歳の夢載せて何れの港にか向ふぞ、それと目には定かならず候も、今日ばかりは板一枚に命預けし事をも打ち忘れ、朝日受けて金色に映ゆる帆の下に酒酌み交し、海上に初春迎へ居り申すべく、是ばかりは都の人の見難き景にて候ぞ。

元日の情景は右の外、君慕はしの餘りに細々と認め候て、島の初便に托し置き候へば、今頃は定めて御落手に相成り、吾と同じく幾度も繰返し居給ふ事と存じ候、此處二週間も經ば、梅も咲き鶯も初音漏し候はん、何れも小包郵便にて進する事叶ひ難けれど、拙なきながらも筆の力假り、聞え上ぐるに骨咨みすまじく、君にも御讀書何かの餘暇に、珍しき都の御通信願はしく候、餘は何事も後便にと、御返辭に代へんと斯くは筆執り申せるに候

○去歳の夢載せて來る元日の入船。

○舟は砂濱に引き上げられての注連飾。

○貝殼光る軒にあげられし日丸の御旗の影にも。

○清き波の影、穩かなる鷗の夢。

○吾が小島にも梅咲かば詩思涌かん、自慢は其折にこそ。

短文

無事の御超歳慶賀至極、今より六度新年の御書に接せば、君には錦衣して御歸鄉かと轉待たれ申すに候。問はせ給ひし村の正月は、元日に精一杯の筆試み發送致しおき候へば、改めて繰返すまじく、次は梅信に候よ

其二　谷村の新年

八重山中より、例によりての賀詞呈し奉り申し候。

○初日影さす雪の窓にて筆執り、谷村の正月のとり〳〵少〳〵聞え上ぐべく候。

○げに四海みな春よ都遠き山村にも元日参り申し候。

○一家悉なう春迎へ

◎其二　都の兄へ　故郷の弟より

慕はしの吾が兄上よ、東京にての元日を、如何に楽しく迎ひ給ひしぞ。朝日に映ゆる皇城のさま、都大路の賑ひより、数知らぬ家々に飜る日丸の御旗のさま、何から何まで御筆に上し給ひ、既に東海道下り汽車に連ばれ居る事と、妹とも噂し合ひつゝ筆執れるが此書にて御座候よ。此六七日の頃には、面白き兄上の御手紙受くるかと、そを楽しみに夢重ぬる吾々二人にて候も、此方の春をも聊か聞え上ぐべく候。

先以て御安心願はしきは、父上は六十一、母上は、五十六、妹は十二、斯く申す私は十五、何れも打ち揃うて

雪の草堂に和氣洋々と溢れ。

○溪流は相變らず太古のひゞき。

○住めば都とやらの諺、一家賑かに屠蘇に醉ひて。

○門に到るの賀客絡繹として絶えぬば御地の事、此方には驚さへまだ音づれ申さず候ぞ。

目出度年を谷村に迎へ、半ば雪に埋もる草屋に、屠蘇の酒酌み交し候に、御両親様には分きて御機嫌麗しく、兄上にもよき年、都にて迎へられたるべし、との御言葉にて候ひき。事新しく聞え上ぐるまでもなく、儀式擧ぐる前に初鴉の聲戴き、さらさらと清き音して流るゝ谷川に若水汲みしは例の通りに候ひしに、妹が伴して木の香薫ずる新桶携へしは今年が初、こは兄上のしろし召さぬ一事に御座候。

此書認め終らば、母上の慈愛温かき春着に、山路に吹く初東風の寒さを忘れ、右に雪の姿の小富士仰ぎつゝ、嶺越えて妹と二人づれにて、村の學校へ登らん筈、書さ

○年々同じ元日ながら、今年は雪降りて面白く。

○氷柱垂れし瀑の下に若水汲みしも愉快に、是も谷の底に住めばこそ。

○君は如何なる春を初めて都に迎へ給ひしぞ。

○屠蘇に勢つけて筆驅りしが是。

漏し候事共は、後便にと先は右まで。再拜。

二伸、去歳の冬下され候ひし二品、私は例の帽子被り、妹は桃色リボン挿し試みしに候、御惠み忘れし樣に候へ共、書きたき事は多くして筆自由に動かず終に此に御禮致せる次第にござ候。

短文　げに千里同風、目出度も屠蘇の杯を明けて八十の祖母樣に、次は五十八の父上に献じ、一家異なく新年を迎へ申し候。兄上には御幸福の中にも、如何なる春を都に迎へ給ひしか、承りたきは祖母樣と私とが最も切なるにて候。右御祝詞に代へてと、敬白。

同　返事　都より

雪の元日の御書、今し都にて拜見。

○新年早々御自慢面白く拜讀。

○雪犯しての登校、さては溪間の路に起る君が代の唱歌。

○忘れやらぬば瀑の下に若水汲みし昔。

○山の正月にそむくこと六歳。

◎同　返辭　故郷の弟へ　都の兄より

新年のお手紙は今日拜見、御兩親樣はじめお前達も、目出度年迎へられしとや、遠き三百里の此方より御喜び申し上げ候、東京の正月の模樣は、美文風に書き既に差出しおき候事なれば、今頃は話の種になり居るぞと、此兄は想像するに候が、それに付けても故郷のさま何から何まで歴々と目前に見はるゝに候。東京の春も、申し送れる文により、文武百官の嚴しき大禮服着、大路に往交ふ凛々しき樣や、美しく着飾れる娘等が羽子撞く姿、夜な〳〵の夢に上る事と存じ候。前者は次郎、後者は愛子が夢にて候ぞ。

長文

○都の元日、相變らず賑かに候も、年々の事にて、自慢の種も盡き申し候。

○朝日の小富士に上るさま、今に尚忘れ難きに候。

○葉書に賀正との二字、他は吾に倣べとの御謎にも乎。

○厭しきは都の初春然るにても繼しきは靜けき山の元日。塵深き書窓に、御地のさまを偲び申し候。

○梅咲く頃にもならば、鶯と初旅試み都へ御越し如何。

○此方も花咲かば、御たよりの材料多きに候ぞ。

其三　海村の新年

淋しき海村、初日は矢張り丸う上りて候

目出度も年迎へられしは前にも祝ひ候が、夫より尙も嬉しきは、手紙の書振の上達せる事にて、趣向も面白く順序も善く整ひ、一別後の御勉强も文句の表にあらはれ今後も此調子にて進まば、優等は保險付とは存ずれども何事にも油斷が大敵、他人に賞めらるゝ樣に今一しほの奮勵願はしく候ぞ。

二伸の文句も大した疵には非ざれど、これは『此書認め終らば、母上の慈愛温き春着に云云』との項に、何とか趣向をつけ、面白く書き入れたきものにて、書直しを厭ひし痕跡ほの見ゆるは、文に忠實なる者の敢てせざる事咎めはせざれど、以後の注意が肝要にて候ぞ。序なれば一筆書き添へ申して候。

短文　元日の郵箋今日落手、無事の御超歲御目出度との詞、祖母樣と御兩親へ奉り、御前方兄弟へは、益勉强望ましとの語をまゐらせ候。東京は初正月につき、珍しき事多く、そは日記に控へおき候ゆゑ、松の內すまば淸書し、郵送する考にて候へば、十五日過ぐるを待たるべく候。

◎其三　山村の友へ　海村の友より

長文　先以て山なる君が新年を賀し奉り候、明後日頃は例によりての御自慢、驛使に傳へられて吾手に落つる

○數ならぬ吾が家にも、目出度春音づれ屠蘇の醉に漏れず候ひき。

○昨日まで荒れ狂ひし北海の波も一夜にをさまり候て。

○此處、十戸に足らぬ浦曲にも初東風吹き渡り。

○莊嚴なる海の初日出、今年は君おはさに候はんも、それに對する御返辭は後日の事、此方海村の正月の模樣、稽古としての筆執り、少々聞え上ぐべく候。若し聞え難き節も候はゞ、否とよ、聞えがたき節多かるべければ、御批難は覺悟の前にて呈せるに候よ。

山は相變らず雪深く、而も空高う聳えし事なれば、君が初日拜まれしは、僕より一時間餘の後かと存じ候。さるにても頭を横にふり、否と示し給ふや、如何に。今年の初だよりとして、確たる御返辭戴きたく候。僕は、雪よりも白き砂に二王立ちなし、蒼海の底より上る朝日の影全身に浴び申し候。殊に南うけの磯なれば、春信殊に早く、稻荷社の朱の鳥居に、白う映るは野梅のそれにて候。長汀曲浦、松原續くさまは前年と同樣に候も、電車の通ふは元日よりにて候ぞ。其内御寸暇もあらば、一日吾が磯村に來て屠蘇に醉ひ給へや、生洲の鮮魚御希望に任せて割き申すべく候、不宣。

短文　此處、五十戸の海村ながら、新しき年迎へ候ては、神心共に清けく、別の世に生れ出でし想ひ致し候。君にも御達者にて、瀑の音近き御家に、目出度も御越年の事と賀し奉り候、頓首。

◎同　返辭　海村の友へ　山村の友より

御賀狀拜見。新年は山も海も御同樣に目出度、

れば、只一人拜し申して候。

○八重の汐路には紫紺の湖涌き、岸に寄せ來る太平の象。

○聞きたきは都の春の模樣。

○筆惜み給ふべからず。願ふは、君が住居の山の元日。

同　返事　都より　山より

磯村の初春、詞の

花咲き匂ふ君が才筆に描かれ。

○都大路に塵めぐる車馬のひゞき厭しく濤聲鷗語の正月、今宵夢に止せ申すべくと、初信嬉しく。

○都のさまは、既に一書呈しおき候よ

○吳々も忘れ難きは海の底より差上る朝日の影にて候。

○山の朝日とて元日に限り、四角なるにも候はず。

○千里同風、君が海村に屠蘇酌む頃は、僕は漸く山の肩の朝日拜せるにて候べし

○餘は　燕　姬の初旅に託してと、草々

新年小集

其吟社小集明幾

—春—　年始狀

舊倍の御交誼願ひ奉り候。御待ちの自慢は、舊暦と共に今年より筆絶ち候へば、幾年經るとも御手には落ちまじく候ぞ。只今拜見の御書は、餘りに善く聞えすぎ、御返辭致し樣もあらざれど、朝日拜する事の遲速、電車通ひ初めし事のかず〳〵、才筆に任せての御自慢、僕が今年より例の筆絶ちしも蟲が知らせての事なるべく、本家は既に君に移ると申すより、寧ろ奪はれたりと申すが至當に候はん。御末筆の屠蘇も鮮魚割き給ふ事も、皆是れ僕に對する御厚意、一尺餘の積雪を膝にておしわけ、御村に出でん事も辭すまじけれど、君には去歲の冬、御良緣之れ有り御婚儀擧げられし由、吾が山里はすて難き雪の眺めに候へば、是非に新婚御旅行今の間に願はしく、彼の日の出を後らす山越えもせば、淋しさに名高き温泉も御座候へば、必ず御越を待ち奉るに候、拜酬。

短文

早々の御祝詞有難く、此方も住めば都とやらの譬に漏れで、一家異なう年迎へ候情景は筆短の盡す所に非ず、清き谷川の音、青き山の影、太古のまゝと御承知願はしく候

新年の小集に招く

長文

拜呈例により明三日午後早々、小生宅に於て美文會相開き申すべければ、腕によりかけ御出席願はしく

—春—　新年の小集に招く

日某亭に於て相催度

○明幾日、新年宴會相開き度、場所は中の島の銀水樓。

○不相變屠蘇に浴し居給ふ乎。

○例の美文書翰會、明日小生の宅にて相開き申す筈。

○初會の事に候へば成るだけ盛大に催したく存じ候へば。

○才筆の君漏れ給ふこと之れ有り候はゞ寂寞を感じ申すべく

○歌留多會の御都合も之れ有り候はんも御繰合の上。

○餘興は申さぬが花に候べく、吳々も御出席願はしく候。

同　返辭

御案内は固より待ち

何れも天狗連の事に候へば、鼻突き合さぬ樣の御用心然るべく、東京より歸省中の從兄弟共へも案内致し置き候へば、例年に比しては一層の盛會に之れ有るべく存じ候へば、漏れなく全會員と一堂に筆戰はせ度、兵粮は雜煮にして、元氣つくる爲には屠蘇をも献じ申すべく候。又父よりは優等の御方へ賞品呈せん筈にて、點は自分に任せよとの申し出で、課題も其場にて出すとの事にてござ候。夜は餘興として、漢詩歌留多會相催さんとの協議も幹事にて略相決し居り候へば、かたく御參會待ち上げ申すに候。勝手ながら列記の諸君へ、御廻し願ひ上げ候草々頓首。二日。

短文

來る六日午後正四時、某樓に於て新年詩會相催したく候間、何卒御繰合せ御出席願ひ上げ候。追て當日は、某先生も御臨席の事、御承諾相成り居るにて候。右御案内まで

同　返辭

御廻狀只今拜見。例年の通り美文會御催しの由豫て御尊名承り居し御從兄弟樣も御出席とや、一しほの御盛會察するに餘り之れ有るが上、御尊父樣には自ら點者となり給ひ、優等者へ賞せんとの御厚意、實に逸し難き御會にて、如何に枯腸を絞ればとて、才學乏しき小

し事　必ず御末席汚し申すべく候。

○此頃は詩筆抛ち居り候も、酒にて名句釣りもせばやと。

○枯木も山の賑ひとか、必ず筆携へ申すべく候。

○萬事さしおき參會致すべく候。

○餘は詩陣を布き候ひし上にと。

生好文章綴り得べくもあらず候も、せめて御末座へ列せん事、身の光榮と存じ候に、彼の御承知の敷島會に推されし歌留多競技會へ出席として、三日の早朝東京へ參らん筈、恥かく爲の旅行とは覺悟致しながらも、推されては辭し難き場合も之れ有り、不本意ながらも御筵に列するの榮に浴し難く、委細は秋汀君へ言づて致しおき候も、右の次第一應聞え上げ候。餘は歸宅の節にと、草々。

短文　御清集への御招き有難く、久しく詩筆すてし僕に候へども、枯木も山のものに候へば、世に謂ふ譬の如く少しは御興を助け申すべく、必ず參上の筈に候。拜答。

故郷の友へ

處定めぬ浮草の跡あはれにも迎へしは旅の空の元日。

○落魄の初春、此處にて相迎へ、悲なく屠蘇の杯を擧げ申して候よ。

○去年は山に、今年は海にて元日に遇ひ申して候。

故郷の友へ初だより

長文　君は都にて賑しき初春に逢ひし事と賀し奉り候生は除夜に迫れる二十八日に某港を出で、元日は某處にて身を預けしは小さき和船、不幸にも逆風に遇うて四日を海上に漂うて暮し、目出度初春迎へしは某沖、今日は流石に風やみ波穏かに、南は奥したる如き千里の海原北は連山縹緲として陸遥かに見え申し候。船は東雲白む曉に、帆を八分に揚げて東風孕ませつゝ、面舵取りて小島近う進めば、海の底より上りし朝日、艫より射して白帆も碧海も共に金色に變じ、蓬窓の下には心ばかりの酒

○お互に無事なるが嬉しく候はずや。

○如何なる春に遇ひ給ひしぞ。

○旅の正月も矢張り目出度、零落の日記に、幾分か光彩を添へしと自慢。

○梅咲く頃までには必ず歸村の上、共に鶯の聲を下物に醉ひ申すべく候。

酌み、二十八日以來の無難を祝し、坐する一枚の板の底は千尋と申す事を打ち忘れ、明けて目出度と言ひ交した る嬉しさ、筆に盡しがたき程にて候ひき。既にして目ざす小島に帆をおろし、浦の人等には入船と祝はれ、貝殼光る漁家に暫し宿借り、やがて認めたるが此書、御返辭得たきは山々の心に候も、明日は船出して某地へ向はん筈、浮草の跡何處にか落着き候はゞ、重ねて一書呈すべく、先それ迄は不相變にとの一句を御名殘に致しおき候

短文　海に生れし身の旅より旅のさすらひ
一丈程雪積れる山家にて元日迎へ申し候、君は御幸福にも故郷のよき春に遇ひ給ひしを祝し奉り候。敬具。越路より。

歌留多會

其一　開催

去年結びし漢詩かるた會、明幾日開き度

○御同樣に合戰待ちし歌留多會、しかも目さき新しき漢詩のそれにて候。

○明後幾日、某所にて開戰の筈。

○君は申すまでもな

歌留多會

◎其一　開催の檄

長文　物の四日を夢のやうに暮し、いよゝ明日は詩歌留多會開催の期と相成り申し候。戰場は僕が立籠る梁山泊に之れ有り、時刻は朝の正十時にござ候。去歳は敗績致し候へども、勝敗は固より時の運、豎子何處に居るぞと例の一聲大喝、單騎と三軍を提げてを論せず、犇々と御攻め寄せ然る可く、覇を爭ふの中原としては狹く候はんも、二十餘人を容るゝには猶餘りある座敷、夜に入ら

く早々の御出陣。

○花形の君來ずば會戰春めかず、と一統の斷言。

○今年の初會に候へば、總會員を一堂に集め度。

○吳々も敵に後を見せ給ふまじく。

同　返辭

開戰の檄拜誦、面々の英雄雲の如くに集り、意氣は宇宙を呑み申すべく。

○御趣向の漢詩歌留多、文學趣味殊に嬉しく候。

○敵に後などを見せ末代までの恥辱貽し申すまじく。

○花形とは少々恐縮に候も、陣頭に景氣添ふ覺悟にて。

○雜兵も戰場には

ば、竹よりも太き蠟燭焚き申すべく候。吳々も敵に後を見せ給ふ勿れ、萬一にも稽古積まずと逃げ給はゞ、末代までの恥辱と申すもの、一朝緩急あらば、君は矛執りて起ち給はざる乎、如何に〳〵。

短文　明幾日、例の歌留多會相開き申すべく候間、腕によりかけ御出陣願はしく、人氣男の君來ずば、戰場春めき申さゞるべく、必ず馬を陣頭に立て給へや、時刻は午後早々にて、後れ給はゞ番外にて候ぞ。

長文

◎同　返辭

文學趣味と娯樂とを兼ね得たる漢詩歌留多會、いよ〳〵明朝十時に御開きの由、待ちに待ちし飛檄の事とて愉快に拜見な致して候。遠慮は物と時にこそよれ、父子兄弟にまれ、敵と呼び敵と呼ばるゝは、義を重んずる我國古來の美風、先登は誰にも讓るまじく、殊に僕を敵とし給ひ、彳亍々と攻め寄せよとは、氣性勝れし君なればこそ。三軍率ゐるは最易き事に候も、衆を恃むは吾が一生の名折れ、士氣高ぶる君が軍を輕視する譯に候はねど、久々の腕試し、首取るか首授くるか、單騎驅りて一汗かき度、吳々も曾稽の恥を重ね給はぬやう、御注意促しおき申し候。兵粮は固より御用意の事とは存じ候も、萬一不足もせば御同樣に、眞の戰爭は出來申すまじく候

必要と信じ候へば、時刻に先んじ參會。

○所屬は紅白何れの軍かは存じ候はれど君には背かで出陣致すべく候。

○去年の恥辱を雪がん爲に駈けつけ申すべく候。

其二　誘引

明日午後より、歌留多會開催の由にて

へば、大豪傑氣取り共通の意志にて、此品差し上げおき候。自慢書けばとて、明日は筆の戰爭に候はねば、先以て此位に留め、餘は御互に陣を張り候上にと、拜答。

短文　御狀拜見。人氣男とは少々恐れ入り候も、戰場に最期の花咲すは武士の本分、明日は午後早々、吾家を辭し申すべく候。

◎其二　友を誘ふ

長文　拜呈、時節柄日夜にかけの御合戰、御功名の程さこそと推察致し候。豫て御噂致しおける風流子主催の歌留多會、明七日午後一時を期し開く由、力味返りて通知致し來り候。會場は例の梁山泊との事に候へば、英雄

○友より出陣せよとの飛檄。

○斯道にかけては御得意の君、金鵄勳章はたしかなもの。

○君も誘引せよとの案内の書參り候故。

○敵は去年より戰闘準備に餘念なく候へば、少しは相手に相成り申すべく。

○招きは則ち挑戰

揃にて中には花恥かしき女將も相雜り申すべく、其盛會は申す迄もなき事に候が、君は固より吾軍の驍將、一夜仕込の腕なればとの御讓歩ならば兎も角、そを遁辭に逃げもし給はゞ、承知相成るまじく、萬一他に御先約等も有らば、代理の將其處に向け、此方には是非に御出馬願ひ上げ候て、敵の鋭氣を美事に挫き申したく、斯く强ふるも、畢竟西軍の恥辱を重んずる次第にて、功を吾手に收めんとするに非ず候。吳々も只今より御用意願はしく明日の會戰時刻に迫らば、一命を的に身を挺し、敵陣目掛けて御案内致すべく候へば、御出陣の儀今日より促し申しおき候ぞ。

狀に候ぞ。

○會場へは小生御同伴仕るべく候

○日來の手腕にて敵に一泡吹かせ給ふべく、旁々御誘引。

○戰ふに交際の親疎なき事、功名は腕次第にて、御遠慮は無用に候ぞ。

同　返辭

すきの道なれど下手

短文　只今敵よりの挑戰狀に接し候、君には御鍛錬其極に達し候はん、御同樣に强敵を見て退くは武士の恥づるところ、敢て明日の御出馬促し申し候。會場は某寺の書院にして時刻は朝の正九時にて候。御誘ひ旁右。

◎同　返辭

長文　曰く、時節柄。曰く、御功名。頭より浴びせかけての御使嗾、此儀に對しては御返辭致し兼ね候。御誘引の漢詩歌留多會は、組織の當時より文學趣味と興味との點に於て、小倉百人一首に勝ること夙に同意を表せる事に候へば、敵强ければとて出陣辭し申すまじく、髭武者と花恥かしき女將とを論せず、薙ぎ倒ふし斬り立て度り合ひ、力の有らん限り奮闘試み申すべけれど、御軍に對して御希望程の功は奏し難く候はん。殊に明日は午前に限り餘儀なき用件之れ有り、御意に應ずるを得ず、午後よりならば、夜にかけても苦しからず候。萬一御會戰午前と相決し居り候はゞ、君には整々堂々の陣張り、敵に對抗し給ふべく、僕は固より木葉武者に候も、一命を貴軍に捧ぐるに吝なるまじく、用事すまし次第に屠蘇浴びて元氣つけ、遠くもあらぬ梁山泊、膝栗毛に一鞭當て大聲に呼はりよばはり、眞驚然に砂烟揚げ、軍門に駈けつけ申すべく候。急ぎ御返辭のみ。

たる僕、御加勢には成るまじきも。

○願うてもなき御誘ひ、討死は覺悟の前にて御供仕るべく

○只今より激戰想ふも愉快に、女將の首提げたく候ぞ。

○一夜仕込の腕に候も、命を的に眞先に、馬躍らせ敵に度り合ひ申さん筈。

○明日は御繰合の上前軍に願ひ上げ度候

○唐詩選は少しは暗誦出來候位、敗るゝは承知にて。

○萬事御指揮の下にて一汗かき申さん。

其三　戰場より

今し戰爭は酣に候て敵味方混じあひての奮鬪に候ぞ。

○敵もさる者、新手を入れかへ入れかへ意氣頗る振ひ。

○ともすれば追ひまくらるゝ吾軍。

○討死は覺悟と申しながら、今にくき死場所を見出し得ず。

○幾度か吶喊試みも其功を奏せず。

○形勢甚だ危く候ぞや、待つは御出陣の一事にて候。

短文　羽書拜誦、戰挑みし天晴の敵、古來征戰幾人か回るとの句の如く、沙場に骨を曝すは覺悟の前、馬上に琵琶とり悲歌一曲、葡萄の美酒に勢つけ、御指定の時間に後れで某寺に會し申すべく候。

◎其三　戰場より

長文　互に準備十分に整頓せる事とて、定刻に一分も後れで開戰、時に或は散兵となり、時に或は吶喊となり、亂れ合ひての奮鬪、寺の書院は忽ちに修羅場に變じ組討せんばかりの有樣に候。敵軍には、東京仕込の若武者、軍氣を振はす女將軍さへ現れ出で、仲々侮りがたく手をかへ品をかへ、破竹の勢にて攻め寄せ、味方の形勢時々刻々非に陷り申し候へば、萬事措きて御出陣望まし く、酒敵御引受けとならば、そは小生代りて當り申すべく候、君若し片時を後らし給はゞ、永久築城の吾が壘は敵の手に落ち、終に會稽の恥辱を重ね申すべく、防戰なしつゝ、戰況御報かたく御出馬促し申し候。

短文　敵を侮りしは全くの不覺、今し攻めまくられ、籠城の有樣に候へば、御得意の腕見し給ふには好時機、奇兵用ゐられよ。

長文　◎同　返辭

飛札拜見。日來の噂より敵は案外に手強きよし

殊に援兵を東京歸省の友等に乞ひ、女將さへ凛々しくも立ち見れ候ひしとや、旁の御苦戰察し上げ候も、御推察の如く此方には酒敵攻め寄せて間を得ず、敵の策略に陷れるかとも存じ候も、斯く悟りては容易に兜を脱ぎ難く献しつ献されつ、勝敗今に決し申さず、吾が軍の事大に患はしく候も、何事にも降參の二字は男兒の禁物、斯道にては智勇兼備の君、暫し御支へ願はしく、此方も敵退け次第駈けつけ申すべけれど、間に合はずば再擧あれ。

短文　急報の事共承知、不得意と得意の如何を問ふに遑なき場合、奇兵は殊更に見合せ只一騎正面より敵に當るべく候。

同　返辭

想像よりも敵は強き由、御苦戰の程察し上げ候。

○暫し御支へ願はしく、此方の酒敵退け候上にて出陣。

○場所を得ば名譽の御討死も然るべく

○直に出陣致すべく候も、一歩も退き給ふまじく候。

早春出遊に誘ふ

初鶯の音に喉かされ野遊思ひ立ち候處。

○只今より近郊へ探梅の遊歩こころみ申したく候に。

○梅信如何と存じ候も、野べの春風に歩するが目的。

○萬一、梅に逢はず候とも、一二首の詩、

早春出遊に誘ふ

長文　世は流石に春に候もの哉、昨日まで蕾固かりし盆梅、一二輪白う咲きそめ候て、吾が書齋には幽香流る る今朝、例の遊意そゞろに動き出で、野水淙々と玉の音響かし、小橋斜に架るほとり、竹外一枝の春うたゝ偲ばれ申すに候。目ざす地は、何處と限りたる譯に候はねど御承知の延命寺あたりは南向にて日當り宜しく、彼の林下の佳人に逢ふは必定に之れ有るべく、萬一事外れ候とも、地は所謂山水明媚・詩料に乏しからず候へば、半日の出遊決して徒勞には屬し申すまじく、善は急げの諺に

は必ず得申すべければ、あながち損にもなるまじく。

○探梅は名のみと非難する俗人も之れ有り候はんも。

○半日の遊に一升入の瓢こかせば此上もなき滿足。

同　返辭

探梅の御誘引、君なれば、明日とも言はで只今より御伴致したく候。君は固より佳人に意あるの士、御異存あるべしとも存じ候はねど、御誘ひかたく〳〵御都合伺ひ上げ候、不盡。

—春—　早春出遊に誘ふ

短文　明日曜休暇の半日を野遊試み、探梅に打ち興じ度、若し春寒凌ぎがたくは村店に酌み、醉はゞ野寺に茶乞うて醒し申すべく、何は兎も角、今春第一の遊展、君漏してはと一箋斯の如くにござ候。草々。

同　返辭

長文　徒然の折柄只今の御書、有難く拜見、梅一輪一輪づゝの暖かさ、とは尚まだ早く候へども、流石は詩に深き君、鶯に先んじて春探らんとの御出遊、げにもと頷かれ申して候。行先は固より何處と限り申すまじきも、薄寒き東風に屐迎はせんは、御示しの延命寺附近然るべく、場所と申し、御催しと申し、はた時候と申し、何から何まで辭し難き事のみ、石橋人を行外に導き、細流潺緩として耳を洗ふほとり、見出したる梅花は假令一點なるにも致せ、興は如何に深かるべくや。御意の如く、不幸にして佳人に遇はずば、清き山水に目を慰め申すべく尚不足を感じ候ときは、御迷惑ながら歸途高堂の盆梅に醉ひたく候が、此儀許し給ふや、如何に。生は御使者よればこそと申し度。

○うす寒き風は、酒にて防ぎ、處々に御伴致すべく候。

○梅の有無は固より知り難く、酒にて詩釣らんとの御出遊至極の賛成。

○鶯さへ初旅試みし此頃、一二輪の梅花は見當り申すべく。

○竹外の一枝、必ず

吾等を待ち申すべく

○處嫌はず散歩試み候はゞ、思はぬ拾ひものせぬにも限り申さずと存じ。

○野橋となく溪水となく、興はとりどりにて候はん。

春寒見舞

古めかしき語に候も春とは名のみの此頃

り一歩後れて家を辭じ、例の渡場にて御出會致すべく候先は御受けかたく〳〵斯くは御返辭のみ。

短文　百花の時節は俗士に讓り、只僅かに數點の春を竹外に得ば宜しく、村店の酒も野寺の茶も覺悟の前にて御伴致し申すべく、勝手なる事に候も順路に付、明早朝よりにても御誘ひ煩し度、先は右まで、餘は野べに袂聯ねてと、拜復。

春寒の頃老人に

長文　春とは名のみにて、大阪灣に往來する白帆松原越に見る影尙霞み申さず、武庫六甲一帶の連山、今に殘

四山に殘る雪のかげまでが寒く候に。

○一たび梅見さへ終へたるに、此寒氣は何と評して宜しかるべくや。

○凌ぎがたき此頃の春寒、世は逆まとまで疑はれ候處。

○雪さへ折々降り候て、酒價の暴騰も理なきに非ず候よ。

雪消えやらず候て、折々は霰さへ降る此頃、梅咲き初むればとて、野鶯は未だ聲呀えず、岡本へは酒旗颺らず、餘寒凌ぎがたく候に、御老人樣には如何に暮し居給ふか名にしおふ寒國の御住居、御樣子伺ひ奉り候。此方は老父母はじめ斯く申す私も無事にて、朝早う電車の人と相成り、大阪へ通學致し居り候、此儀餘事ながら御放神下されたく候。此書と共に鐵道便にて差立ておけるは、灘の銘酒菊正宗、壜は小さくとも一ダース入の箱、封切りて春寒に敵し給へとの寸志に御座候。交通開けたる今山御地にも數多之れ有り候はんも、小百里越えて來し物よと御笑納下され候はゞ、幸甚の至りとは老父が一言にて

○分けて御地は北海の怒濤を受け、一しほの寒氣に候はん。
○若き身の吾々等さへ、寒しと眩かるゝを、御老體の叔母様には、此頃を如何にして居給ふぞ。
○御地は名高き雪の北國、如何に寒氣はげしかるべき。
○御同様に閉口とは

—春—　春寒の頃老人に　四〇

候ひき。紅紫とり〳〵花の世と變りゆくは、此處四十餘日の後に候べければ、折角に御保養祈り奉り候。敬白。

短文

天地春尚淺く、分きて今年は凌ぎ難き餘寒、御老體には御健勝にか、伺ひ奉り候

此上ながら御自愛專一。

同　返辭

長文

御書拜見。當世流行の美文風の墨のにほひ床しく、御影あたりの景色あり〳〵と目に浮び、そぞろ歸省したる心地致され、手紙も此に到りてこそ始めて、其德を發揮せりと申すべく、一別後の御修養只々感心の外は

此方の老人が書き添へよ、と申し出でたる一言。
○御地は南受け、吾が里の如き寒氣と存じ候はれど。
○例年には梅盛りの此頃、今に野鶯さへ來らず、奇寒肌に徹り候て。
○今年は何處も同じ春寒かと存じ候へ

く、幾度か目鏡おし拭ひて掛け直し、太郎と共に三復致し候。此方は雪の越路、寒氣は春に入りても尚減じやらず、動もすれば舊臘に倍して感じ候も、年久しく住み馴れては身には聊かの障も之れ無く、炬燵を友に句案ずるが日毎の閑課、御注意下されし自愛は、仲々怠り居らず候も、待たるるは梅日和にて候ぞや。御惠贈の銘酒は今朝程拜受、即座に封切り候ひしに、芳洌の氣紛として忽ち鼻を撲ち、立ろに殘裏を劈き候て、正宗との銘小首傾けて嘆賞致し候。同病相憐むとやらの事思ひ出で、知人にも御厚意分ち候に、春光そぞろ顏に上りしとの禮を得申し候。御挨拶の後れし代り、餘事まで書き添へて斯く

—春—　春寒の頃老人に　四一

ば此上にも御自愛専一に候ぞ。

○御起居如何にと伺ひ奉り候。

○此品、御見舞のしるしまでに奉呈。

○此書と共に小包郵便に付しおけるは、御見舞に代へての品にござ候。

○この一樽、灘の友より贈れるもの、封切り給ばゞ、格別の春色忽ち御顔に上り申すべく候。

同　返辭

御書の如く、如何にも凌ぎ難き餘寒にござ候も。

○今年は暖かに梅見さへすまし候のちの寒さ。

○達者と申したけれ

御父君には、よきに御禮をと、拜復。

短文

御見舞有難く、昨今の殘寒、村酒の價をして高からしめ候へども、愚老は尙健頑今朝は孫等の雪達磨しつらふるに手傳ひし程にて候。此も全く、三十七八年役に、遼東の雪と戰ひし甲斐かと存じ候。呵々。

友に餘寒見舞

長文

一たび南枝に春の影を認めながら、天氣又もや寒う相成り、東風料峭として微雪を送る昨今、君には如何にして居給ふぞ、去年の如、探梅の御自慢待たれ候に其か御通信なきは、御地も矢張り殘寒嚴しく候て、日毎御書齋に籠らせ給ひ、詩と酒とに興を助け江南に夢馳せ給ふべし、と推するに難からず候よ。遠からず梅日和に相成り候べければ、月瀨への一遊促し申すべく、其折こそ詩思浮ばずなどゝ逃げ給ふまじく、只今より御都合願ひ上げ置くに候。何事もそれよ彼の、梅一輪一輪づゝの暖かき日和を待ちてと、拜具。

短文

江南の御地は、水暖かに柳は絲を掛けそめ、梅日和打ち續き候事とは推しながら此處北海の寒さに引き比べての老婆心、御見舞の寸楮斯くは奉呈致し候。頓首。

ど、老體には殘寒格別に相こたへ。

○御地も相變らず凌ぎがたなの餘寒とや

○子等は手の甲赤うして息吹きかけ、雪達磨しつらふる此頃春寒の説明も無用にて候はん。

○江南なる吾が里も未だ雪消えず候て寒さ強く。

同　返辭

長文

相變らずの御才筆、何事につけても情景共に匂ひ床しく、今度も面白く拜見致し候。御書の如く、既に竹外一枝に春色を上しながら、昨今の寒氣詩人いぢめ殊に憎く、探梅の御自慢待たれ候などとの一句、是も亦憎し。生は詩に苦吟の事こそ廢せね、多病の點のみは才子に以通ひ、朝な夕なに藥爐にしたしみ居り候て、酒には緣遠く相成り、一しほ此頃の寒氣を破るに物もなく、殆ど閉口の至りに候。只御推量に違はぬは、江南の夢に候へば、逃げも隱れも致すまじく、又いざと申す其時に遁辭をも設けまじく候へば、月瀨の花信必ず忘れ給ふべからず、後の證據に御書は大事に文筥の底に藏しおき申すべく候。吳々も一片の動箋屆かん日を、生は首長うして待ち居るにて候ぞ。拜答。

○お互に待つは梅日和に候ぞ。

○隨分御保養願はしく候ぞ。

○御惠贈の銘酒、即座に傾け、春寒に敵し申し候。

○幾杯かを重れ、人間一味の春を領し候

探梅歸後友に

生等は野べより歸宅

短文

御葉書拜讀。此處江南の地も尚寒く未だ梅信を傳ふるの驛使音づれ申さず、御推量は少々的を外れ候も、生は詩二分酒八分に至極健かに暮し居るに候。拜酬。

探梅歸後友に

只今探梅の遊を終へて歸宅、これなる一枝は今

長文

探梅歸後友に

獲物は是なる一枝にて候。

○今日、君伴はざりしを、一行の者ども口惜がり候て。

○思はぬ梅にまで會ひ、野茶屋にての分韻興深く。

○初鶯に導かれて處々徘徊。

○細流に影ひたせる二三輪の梅花。

—春—　探梅歸後友に

日の獲物、御用事ありとて同行に漏れ給ひし君を、聊か慰め奉らん爲に呈せるにて、僕等が寸志に外ならざるに候よ。さて早朝、野路の霜柱ザク〳〵と蹈み碎き、心地よくかはす歩毎には、君の御噂致しながら同志と袂うち聯ね、目あてもなく彼處此處逍遥ひ、半里行き一里進み終に三里餘を辿りて某村に入りたるにて候ひき。今日の遊、あはれ徒爾に屬すべしと評し合ひ、立ちながら瓢傾けて微醉を試み、聯句に興やるなど例の通りに候ひしが思ひがけなき茶屋の垣根に見出したるが則ち此一枝、折るには仲々骨折れ候ひしも、終に野翁賺して乞ひ得たるにて候ぞ。よし枝は一本にて花は二三輪に過ぎず候ともこの頃の野遊のさまを偲び給ふには、決して御不足あるまじと、同行に代りて生より一筆添へし次第、文意の足らぬ點は、此佳人に問ひ給へや。

○竹外に殘雪と見しは、此に呈せる野梅の花の白かりしにて候ひき。

○今日の野遊の興、此梅に偲び給へと進らせるにて候。

○書き添へしは梅の外なる獲物の一首。

同　返辭

御清遊を終へ御歸家

短文　今日の出遊、運よく目的を達し候。携へ歸りし一枝、君が御詩料に供せんかと存せしかど、故意に書齋に留めおき候へば、明日にても御枉駕成さるべく、野の此頃の景色精しう聞え上ぐべく候。

同　返辭

長文　今日の御愉快、賜りし御書には固より、花少な

とや、殊に御一行に漏れし遺憾を晴らせよとの賜物。

○御樂しみの尋常ならざりしは、御示しの筆にほの見え。

○同じ梅ながら此頃の初花貴く、早速瓶に活け申し候に。

○一枝に天下の春はの見え、幽香書樓に流れ申して候。

き一枝に却つて溢れ居り、御伴に漏れし事かへすがも殘念にて、御厚意の程感じ入り申し候。さるにても強ひて不足申し上ぐれば、日來の御得意に似ず、筆略され居る事に候が、其處が御書に見ゆる如く、梅に問へとの謎なるべく、昨夜は花瓶に活け、枕上におき夢護らせ候に鶯さへまだ鳴かぬ田舍茶屋、先づ御一行の影見え、髭白き野翁が店番がてらに、草鞋作る姿も細流の垣根を洗ふさまも、半ば滅りたる瓢の酒にて翁を醉はしめ、口車に載せて一枝折り給ひしは君なる事をも、歴々と見れ申して候よ。とは申せ、何も彼も夢に上りし其儘に候へば、當らぬ事ども多かるべく、眞のさまは不日參上して承り申すべく、御禮かたぐ右。梅贈られし翌日、幽香漂ふ書樓にて、俳友より。

短文

羨まがらせの御書、今朝疾く拜見致し候。昨夜佳人に遇ひしは、此御たより受けん知らせなりし乎、近日推參な致し、一番駈の御自慢聞き申すべく、一枝咨み給ひしは、僕引き寄せん御策略にて候はん。

梅信は如何

○御使煩せるは有合の品に候も。

○御禮疾くにと存じ候も不在中に候ひしかば、今朝一箋此の如くに御座候。

○賜ばりし梅が香に和して墨磨り流しての一筆。

梅信は如何に
名高き御地の梅信は

長文

御地の梅は年來夢に入り候に、一昨年は雨に流れ、又去年は御約束致しおきながら俗事に妨げられて果

—春—　梅信は如何に

さず、世は梅見る事まで儘ならぬかと口惜しく候も、今春こそ雨降ればとて流すまじく、火降ればとて避けまじく、例の常套文句に候へども、月白く風芳ばしく、滿山雪を堆くし、家も橋も見えぬまでに咲き亂るゝ日取り、前以て御推定御知らせ願はしく候。今年も筆ばかり乎との御疑ひ起し給はんも、前年とて構へて御約束に違ひたる次第に候はねば、必ず信してよ君。

短文　打ち續く梅日和、御地に夢馳すること夜なく〳〵に候。僕は花の多少に論ぜず、君が草庵を月に叩くを喜ぶものに候へば昨今の春信承りたく候。（其一）

○今年こそ〳〵にて背きて七八年過したる御地の春。

○花信七八分に至り候はゞ、一片の郵便賜りたく、豫め願ひ上げおき候。

同　返辭

御尋れの梅花、昨今見頃にて候へば、御出遊然るべく。

—春—　梅信月如何に

短文　今年は又、羅浮の夢を騎鶴亭上に繰返したく候、御返辭は、梅見頃なりとの五字にて十分に候。大阪より。（其二）

同　返辭

御申譯は兎も角も、今し花は四分の春色、氣早き人は既に遊屐試み居るに候が、一雨を經ば八分に及び申すべく、家も橋も香雪に埋もるてふ十分なるを待ち給ふとも、今年は月と相合はず、御希望には少々相適ふまじく候も、三ケ月に宜しきは柳のみにも候はず、竹外一枝にも奇しく、小橋の流水にも亦妙に、青苔深き處にも

○花は六分の春色にして、幽興は此頃に如かざるべく。

○來給ふべし、と書く頃は、尚幾日か夢重れ申すべく。

○全村雪の如き花に埋れんとする所に候へば。

○風香ばしく月も亦白く、村の梅は八分の春色に候ぞ。

○御清遊は、俗人多からぬ此頃に候へば明日と言はず直に。

○黛に代りて隅から隅まで梅の御案内致すべく、待つは御越にて候。

梅花に添へて

例の野梅に候へども今年も亦君が爲に手折りたるが是。

惡しからず、近日に御清遊然るべく候。月瀨は吾が里の上野城より僅かに三里、行くさに柴門叩き給はん其折こそ、御伴して隅から隅まで御案内致し申すべく、宿をも取決めおきたく候も、そは重ねての御書戴き候上にて差控へ、來給ふべしとの御返辭のみ。

短文 花は六分、月は二分と申す此頃、身を榻に預け、春寒を酒にて消し、一夜を詩談に明すは妙にて候はん。そは君と僕とに非ずば不可。殊に花の多少を問はずとの御書、後らし給ふ可らず候。（其一に對して）

短文 梅見頃なりとにて、書き添へまじとは存じ候も、五字のみにては物足らぬ心地致し、直に來給ふべしと續け候。（其二に對して）

梅花に添へて

春のあとは先づ日向の一枝に見えそめ候儘、例により御清賞に供し候。花は二三輪になるにもせよ、苦寒を經て百花に魁せるが愛づべき點、今朝疾く起き出で殘月に和して折りたるが則ち是にて、手かけぬ迄は枝振よしと思ひ候ひしも、小首傾けて眺め候へば、矢張尋常の野梅、只詩の友なる吾よりとも思召さば、又格別の詩趣湧き申すべき乎。此處兩三日を經ば、千萬點の花と相

成り申すべければ、御都合宜しき時分に駕を命じ給へや久々にて淺酌試み申すべく候。

短文　拜呈。只の一枝に候へども、今朝まだ殘月を掛け居りしもの、幸に御嘉納を得ば、榮譽は啻に僕のみに止らず候ぞや。

梅花を惠まれし禮

長文　御心に掛けさせられての一枝、見るからに御庭の曉色あり〳〵と目に浮び、殘月淡き底に歩を運び給ひ彼の枝は惡し、此枝はよし、と擇びて折り給ひし風情までも心に描かれ候て、いとゞ床しく存ぜられ、久しく詩筆擲ちし身の、そゞろ吟興動き申して候。御書あらずとも、近日の内に必ず梅花に隱るゝ御門叩き、月上りて御書齋の丸窓に横斜の影映る夜までも、清談拜聽せばやと存じ居り候。此に添へしは、只今隣僧より惠まれし水仙梅とは緣深きものに候へば、二本三本御分配致し候。然ればとて、御返禮と申す譯には非ず候。不備。

短文　昨日は美事なる梅花の御惠贈有難く町住居の吾家忽ち野趣横生、漂ふ暗香は水よりも清く、俗腸を洗ひ去り申し候。其内間を得ば御禮かたゝ參上致し、御園の春色に醉はん考にござ候。横斜の底に筆執りて斯く。

○淋しき園も少しは梅にて景氣づき。

○一枝御詩料にもと奉呈。

○御名吟得ん爲め一枝にも候はれど。

○是にて不足を感じ給はゞ、何時にても來て見給へや。

同　返辭

花屋にさへ未だ見ぬ此頃の賜物。

○御惠贈有難く、書齋は忽ち春げしき

○御庭の春も一枝に偲ばれ申すに候。

○御命なくとも例の一詩得ば御斧正願ひ上ぐべく候。

○御惠みの梅に俗腸を清う致し候。

○後れながら幽香聞きつゝ斯くは執筆。

觀梅に請ず

去年、賞め給ひしを忘れ難く、吾家の春に醉ひ給はるべく。

○敷へもきらぬ花となる迄には、尙幾日の後に候はんも。

○花は少なくとも、吾が爲に御車枉げ給へや。

○夜に入れば、とて折柄の月、横斜の底に酌み申すべく。

○吾家の盆梅は十分の春色、恍として香世界を現じ候ぞ

○佳客としては君の外、詩僧と一痕の月とに候。

同　返辭

梅見に來ずや、との御書有難く。

長文

觀梅に請ず

常には淋しき吾が城南の假住居、今年も亦梅咲き賑やかに相成り申して候。分きて花は、細かに水精の玉を綴り、千萬點の星かと疑はるゝ許に滿開致し候。年毎に靜境を荒すなどゝ嘲りながら、往來には至極便利の電車之れ有るにて候ぞ。折から月夜にござ候へば、深更にまで觴詠するにも興有るべく、御相手には例の詩僧招き置き候。斯樣に筆に任せて御來駕促せばとて、山海の珍味を御膳に上すには非ず、畫は野鶯の歌と夜は山月の影、風に送らるゝ暗香は固よりの添物にござ候。

短文

例の盆梅色々の春に咲き出で、その白きは雪を釀し、その紅なるは珊瑚を綴り出でしをしほに、明日雅筵相催したく、午後早々御來臨を得ば、草堂の榮これに過ぎずと御案内致し候。敬白。

同　返辭

年古りて老幹は龍鱗をたゝみし名木の梅、枝とに杯取らぬ只今より、美事に玉を綴れる由にての御寵招有難く、花下上るまでの御邪魔は恐入り候も、午後早々參上、飽くま

○梅花の下にて御宴開き給ふ由にて、例によりての御寵招く

○久しく詩壇退げる小生、御末席汚すのみに候はんも。

○御邪魔とは存じながら、林下の佳人に背き難く、参上との二字認め申し候。

○午後に御門叩き候て、清香に醉ふべくで清き香に醉ひ、日來汚れし胸の塵雪ぎ申すべく、幾重にもとり〳〵の御準備は成されまじく、御示しの鶯歌にて十分に御座候。今宵の吾が夢、何處と問ひ給ふべからず、雪は色を含み、風は香を引く君が御園に落つるにて候はん。何事も明日の御筵に陪してと、先は草々の御受けのみ。拝答。

短文

御清筵に陪したきは千萬の心にござ候も、僕不幸にも近來塵事多くて其意を得ず、遺憾此上もござなく候。何れ其内参上致し候て、御勝會の摸様承り申すべく候。草々。

只醒すに一椀の茶あらば宜しく、何かの御準備は御無用〳〵

○先は御受けまで、書外は暗香漂ふ御座敷にてと、拝答

梅見の禮

如何に御招きなればと、とり〳〵の御用意恐縮

○昨日は御清集に陪

短文

御栽培の盆梅とり〳〵に咲き出で候て、御庭園は紅白の春現じ候由、明日は必ず御末席を汚し、例により首捲り枯腸しぼり申すべく候。

梅見に招かれし禮

長文

果せる哉、梅や鶯歌の外にとり〳〵の御準備今更謝するに辭を知らず候。月まではと存じ候はざりしに夜に入りて酌めばとて、太陽より異議の申し出で有りまじなど、御口辯に任せての御引止め、甲を蕉して十分に醉ひ、詩釣らん爲の酒に却て逆に釣られ、賦成らずして

—春—　梅は見頃に候ぞ

梅にも義理缺き、歸後も尙夢は御園の花下に逍遙ひ、苦吟を續け候に、今朝に至り漸く得たる一絕、御禮のしるしにと御覽に入れ申し候。吳々も風流の御筵に侍し候て神骨共に清けく、月夜の幽景今に尙眼前に浮ぶに候。

短文

昨日は名流に陪するの榮を得、清興尙忘れ難く、終宵橫斜の影を枕上に描き、今朝衣を振へば、花片の一つ二つ、心ありげに袂より零れ申し候。右御禮まで、草々。

長文

梅は見頃に候ぞ

見頃にもならば必ず一箋飛してよと、豫て仰せ有りし某地の梅花、今し七分の春に之れ有り、見上ぐる絕壁、見下す谷、上も下も香雪うづ高く、實にや玉乾坤風にも白き影見え、水の音も香ばしく、鶯は處々に亂れ鳴き、朝も晝も夕も又なき景色、冬より初春にかけて淋しき村も、集ふ遊客の爲に賑ひ候て、橋の袂には酒旗あがり、谷の底にも茶店出來、醉ふにも醒すにも都合宜しく候ぞ。梅は櫻より花期長く候へども、今の見頃の機を逸し給はゞ、折角の御淸遊に佳興うすらぎ申すべく、此書御落手と同時に、一刻をも後らさで汽車の人となり給へ、御乘車の時刻御打電あらば、鶯姫と共に御出迎ひ致すべく、吳々も梅は見頃に候ぞ。

し飽くまで醉ひ。

○茶よ酒よと何や彼やの御待遇、梅は殆ど名のみ。

○深更にまで御邪魔致せる段、實に恐縮

○御陛にて日來汚れし俗腸清め。

○飽くまで淸香を嗅ぎ、身は殆ど神仙。

○今朝まで尙御園に醉ふ心地致され候。

梅は見頃

御待ち兼ねの梅は見頃に相成り、鶯も鳴くにて候。

○御出遊待つは僕のみには候はず、早く身も汽車に預け給へ

○俗客集はぬ六分の春、眞賞は昨今に候べければ。

○御詩料に不足有る

まじき吾里の梅。

○日曜の一日を、白砂青苔の溪に歩し給へ、詩興は重く相成り申すべく候。

○水に臨むの一枝、斜に月掛くる幽景想ひ給はゞ、御遊意動き申さん。

○御越を待ち、共に梅林に歩し、青苔を拂うて石に題したく

短文　今し一村全く花に埋もれんとする處に候、早々に駕を命じ給へや、見頃にもならば必ず報知せよとの御一言、忘れねばこそ斯く。若し背きて來給はざる事にもならば、承知なるまじく候。

觀梅は如何に

◎其一　名所のに年々に夢馳せながら、常に一遊し得ざりし月瀬今年こそはと待ち焦れ居り候ひしに、君若し眞の詩人ならば、必ず來よと山人よりの招き、今し梅は八分の花信

○御來遊何時と御一報あらば、村の入口まで籠をして出迎はせ申すべく候。

觀梅誘引

世は梅の噂とりどり僕さへ遊興動く此頃君には定めて。

○打ち續く昨日今日所謂うち打捨てがたき梅日和。

にて、南岸北岸みな香雪に埋められ、中を流るゝ五月川も流れ白からんとする由、未だ其境に足踏み入れし事は之れ無く候も、十五の村々行けどもゆけども、花の盡くる所を知らずと乎。若し迷はゞ林下の月に臥し申すべく苔青き石の上に冷たき夢結ぶも亦風流に候はん。斯かる事は願うてもなき興とは存じ候も、山人に案内致さすべければ、花に迷うて村を失ふなどゝは、筆の上にてのみの事、投ずるには騎鶴亭之れ有る由に候へば、羅浮の夢暖かなるべく、同遊せんとは豫ての御約束、君には固より一も二もなく、頭を竪に振り給ふべけれど、筆序にさまゞの事書き列ね、御誘引致し候よ。

○月瀬の春訪はんものと存じ候處。
○名高き梅の如何に美しかるべくや。
○夜毎に夢に上る某所の梅花。
○詩文に耽る身に候はれど、一日を梅林の下に遊び暮し度。
○來ずやとは、君も御存じの某君よりの來書。
○常に御噂したる觀梅の催しに候へば、御伴願ひ上げたく候
○美文に長け給ひし詞兄漏し候はゞ、如何に淋しかるべく、必ず御越し。
○月にまでも林下に徘徊致し、夜景を詩に賦したく。
○年來噂のみにて過したる梅林に候へば

觀梅は如何に

短文　金熊寺の觀梅思ひ立ち申し候、規模は月瀬に比すべくも有らずとの事にござ候も近きを訪はぬは筆執る身の一恥辱に候はんと斯くは御誘ひ致せるにて候。日は明早朝。

◎其二　吾が里のに年來馴染の仙人谷の梅、昨今盛りとの噂に候ひしに、今朝音づれし乳母の娘に聞けば、樹と申す樹、枝と申す枝、みな花ならざるは之れなく、實に心ゆくばかりの眺めにて、常に通り馴れたる路ながら、言ひ難き景色に幾度か歩をとゞめ、優しき鶯の聲には幾度か耳傾けしとの答へ、遊び給はゞ美文とやら俳句とやらが、數多出來べしとまで添へ言葉、かたく聞き流されぬ春に候へば、只今より一遊せばやと思ひ立てるに候。遠きと申せばとて僅かに三里の路、夜に入らば月を肩にかけて歸らん覺悟、此遊に君漏しもせば、酒に詩に淋しさ感じ申すべく、御左袒あれかしと一統の希望に候ぞ。同行者は月仙、秋汀、春村の三君、主人役は斯く申す僕にて御座候。急ぎての執筆、御推讀あれかし。

短文　明早朝より某梅林に遊び、苔青く水清き谷に花見て一日を暮したく存じ候。花は語らずとも、文藻を養ふには餘師あるべくと敢て御同遊促し申し候。勢揃は小生の宅に候

○案内は先年一遊されし某君。

○同行は某君と某君僕は固より發起者、萬事用意致して候。

○一泊の積りに候へば、御都合伺ひ旁御誘ひ致し候。

○遠くも有らぬ某所朝早く立出で、暮方までには歸らん都合にござ候。

同　返辭

長文

◎其一　名所への返し

叙景抒情共に筆を盡しての御誘引、御同樣に幾年かの春を夢に預けおきし月瀬、或は他の名勝と同じく名は高くして其實に乏しき類かと存じ候も、山人の好意にも花にも背き難く、況して流暢なる美的の御書に對しては尚更、御推量の如く頭を竪に振らざるを得ず候。生は眞の詩人に候はねども、草鞋に足喰はれても跛引きつゝ、何處までもと御後に從ひ申すべく、時間何かの事は後刻一應拜芝の上にと、先は承知の旨のみ。草々。

○梅林に詩陣張らんとの御誘引。

○久しく夢に預けし梅林に候へば、必ず御伴仕るべく。

○想ひやらるゝは梅花の下に逍遙ふ興。

○亂れ鳴く鶯と歌きそひ申すべく、待たるゝは明日の梅見。

短文

れてよかるべき。明日は正五時を期し、難波停車場へ參り申すべく候。僕は算盤にしたしむ身、漏れても恥辱になるまじきも、一度は遊びても損になるまじとの左袒に候ぞ。

短文

にや、俗事に絆されて御伴しがたし、御歸後の雅談に遺憾晴し申すべく候。

◎其二　吾が里への返し

思ひは同じ梅見の催し、君誘はゞやと筆執りし折柄、只今の御書いとど床しく拜見。殊に詩や文さては風流なる御誘引、何とて御同行に漏れ

○舟を放ちては兩岸の景色を縱にし宿りては月前の雪に臥し申すべく候。

○御意の如く、噂にのみ暮したろ幾年今年こそ御伴致し。

○清香に醉うての千鳥足、横斜の影を月下に蹈み申すべく。

○醉はゞ梅溪に口すゝぎ腸清め度。

○貴兄も御越しならば、一泊の許可せし老母。

○明日は必ず御伴相願ふべく候。

○餘は行く聞え上ぐべく、御誘引の御受けまで、拜具。

觀梅旅行の友に

淡ましきは此度月瀬への御旅行。

畫に腕冴えし三君も御揃の由、最も嬉しきは酒を第一に風流韻事にかけては豪の君、今日の遊び如何に興深かるべくや、と直に心に浮びたるにて候。生は例の三升入の瓢に酒盛るべく、青旗颺る橋際の家に迂回致すべければ君等は一歩先に御蹈出し願はしく、八幡社の前にては必ず追付き申すべく候。此書持參の舍弟も是非にと賴みに候ひし故、御一行に御加へ下され度、御承知のごとく力自慢に候へば、成るべく重きもの御持たせ然るべく候。餘は何事も野風に歩を移しつゝと、右まで。

短文

願うてもなき御誘ひ、明朝は鶯よりも先に御夢驚かし申すべく、東隣の秋梧兄も同意につき、共に御門叩く筈にござ候。餘は梅林に詩酒の陣布きての上と、敢敬ず御受け迄此の如くに御座候。以上。

梅見の旅する友に

詞兄には千里を遠しとせず、和州の香世界へ筆載せ給はんとや、實に好き御遊にてござ候。生は父が奈良縣へ奉職の時分、一たび伴して畫中の人となりたるにて候が、梅樹の多きは固より、山秀で水清く天下の絶勝に遊びしは既に十餘年の昔に候も、其景は今に尙眼前を去りやらざるに候、此に添へ置けるは、未だ誰にも示さゞ

—春—　梅見の旅する友に

る拙なき當時の紀行文、梅花と山水との清絶を寫すの點固より稚氣を脱せず候も、路案内には不足あるまじとの自信より、御餞別に代へし生が寸志にござ候。御探勝は尾山に始まり、桃香野に終るに候はんも、宿は早く取り給へや、萬一後れもせば俗人に好室奪はれ候はん。御歸途には再び上野にせず、柳生に出でゝ笠置に迂回なさるべく、笠置は申す迄もなき南朝の古蹟、後日を期し給はゞ又と好機之れ有るまじく、特に御注意申し上げおき候君よ、歩を尾山に入れ給はゞ、御得意の繪葉書に即興の句さら〳〵と書き、御示し願はしく候ぞ。御旅中は隨分御自愛專一。

○梅見の御旅、何ぞ失れ風流なるやにて候。如何ばかりの御得意なるべき。

○醉うて溪亭に題し給はゞ、御名は千古に薫り申すべく。

○生も年久しく憧れしに候へば、精しき御書により梅溪の景色偲ばれ。

○雪なす十五村の梅花想ひやられ申すにて、待つは御自筆の繪葉書に題詩。

○吳々も錦囊に金玉の句盛り給へや。

○御紀行世に出でば洛陽の紙價爲に騰貴致すべくと存じ候。

香世界より

歩々多き梅は人を導き、石打を經て尾山

短文　風流なる月瀨の御遊艶羨、花下の人となり給はゞ、名句吻を衝いて出で、錦囊忽ち重かるべく、御筆の序に一片の郵箋願はし御自慢は歸り給ひし後承り申すべく候。

香世界より一筆

長文　上野名物の田樂に微醉を買ひ、御示しの御紀行を路案内に、歩々梅花と野鶯とに迎へられ、物の三里を恙なく尾山に達し、先づ一目千本に詩眼を清うし、花を潜りて橋の畔に出で、竹林には昔の渡を偲び、左に折れて爪先上の阪を攀ぢ、俗客に先越されまじと宿を約し、

—春—　香世界より一筆

に達したるに候。

○花は仁王めきし僕が身を埋め申して候

○慾深き俗人には、滿足興へまじく候

○梅花の多きに驚きたるにて候。

○一目千本の眺めは筆に上し難く、立ちながら寫せる眞似して見しが是。

○今宵は都合よくも月、夜更けまで梅林の遊試み申すべく候。餘は歸りてと。

旅より

南帆北轍、身は住處定まらぬ旅。

○梅は漸く散り、行先ざきの村の桃の花盛りに候。

○冬の旅着も漸く垢臭く花の世近づき候

欄によりて千溪萬谷の花を双眸に收め申し候。折柄今宵は月に候へば、横斜疎影を蹈みて桃香野に歩し、溪流に舟放ち思ふ儘に春色を弄し申すべく、待たるゝは奇峰月を掛くるの黄昏にて候。御心付け下されし笠置には、一生の悔を貽さぬ樣にと、明日は柳生に出で迂回試みる考にござ候。夜景のさまは實地に臨みての上にと、先は右まで。騎鶴亭の席上、暗香漂ふ欄前に筆執り申し候

短文

幾年か夢に預けし月瀬、流石に梅多く、花を出でゝは花に入り、其大方の探勝を遂げ申し候。昨日の殘りは只今より訪ねん笠曉鶯亂れ鳴く旗亭にて、斯くは一筆。

旅より一筆

長文

山陰の積雪に惱みたるも今は夢、旅囊に降りそゝぐ雨も寒さを感せず、野梅落ち盡して鶯聲は濕ひ候て垣根には碧桃綻びそめ、窓の底には筬の音高う響く谷村世は何時の間にか春深うならんとするにて候。佐保姫の御惠に解け候ひて水晶の樣なる谷川の水は、淙々として吾が南行するを送り、遇うては別れ、別れては遇ひ、時には飛泉と相成り、時には早瀨と相成り、溪亭に宿り候ひては、吾をして枕上の雨かと聞き誤らしめ候て、昨日は五里、今日は六里、山陽の地に入り候ひてより、四十

○苦と樂と五分〳〵の旅、馴れては故郷も夢に上り易く候。

○さるにても、故郷の春は如何に、流石に偲ばるゝにて候。

○是よりは、名所〳〵名所の花廻り。

○百圓の月給取が名譽に候はゞ、千百里筆携へての旅も、亦名譽と申さるべく候

餘里の旅路を、常に南へ〳〵と流れて吾と跡を共に致し八日の夢を重ねて川は瀬戸内海に、吾は旅荷を姫路におろしたるに候。君よ問ひ給ふ勿れ、是よりの行手何處と西なる故郷の花は暫し夢に預け、東なる花の名所のかず〳〵、例の旅の筆に上せて御通信致すべく候。是迄は隨分、山路險しく候ひしも、明日よりは目を閉ぢても歩これ申すべく、行先毎の繪葉書怠り申すまじく候。

短文

筆携へての旅、面白き事と苦しき事との五分〳〵、日記は大分肥え申して候。是よりは花の世に候へば、京都や奈良へ歩を運び、目と心を娯します筈にて候。大阪より。

桃は咲かずや

年毎に御自慢の桃は如何、村の空に絳霞棚引き申さず候や。

○御里の桃咲かば、一日浮世の外の遊び致したく候。

○御島の桃花は、影なる波に漬し、綾織り候はずや。

○桃花の頃にもなら

桃は咲かずや

長文

桃の花は草舍に宜しく、貧家に宜しく、鷄犬の聲に亦宜しと誰かゞ申し候ひしも、僕は陸遠く離れし島に宜しとするもの。然るにても御島のは未だ咲き出で申さず候や、夜毎の夢は暖かき春潮に漂うて、絳霞棚引き海には彩の波織る、御家の畔に到るに候ぞ。去年は來よとの御書戴きながら、障る事ありて御意に應ずるを得ず、今に尙遺憾に堪へざる次第、今年こそ何は措きても腕に覺えの棹執り候ひて、御島の春訪はん心得、御返辭願ふは少々念の入り過ぎたる事ながら、沖に舟浮け給ひ

ば、御村に醉ひたくおし強くも伺ひ上げ申して候。

○花氣蒸して、武陵の春を現ずるには程有るまじと斯く。

○同じ桃花ながらも島のは最も眺め宜しく候儘。

○鷄犬の聲幽なる御村に逍遙ひ入り度。斯くは伺ひ上げ候

―春―　桃は咲かずや

し御留守の日に參らんには、此上もなき不本意なれば斯くは書き添へ申せるに候。陸の友より。

短文　桃花に憧るゝ身は、夜毎の夢あはれにも、菜花畑を越え候て、御村の空に逍遙ふにて候。花氣蒸して一天の彩霞を釀さば、一片の郵筒客み給ふまじく候。

同　辭返

怒濤に洗はるゝ此處沖の小島、東君の惠に漏れもやらず、春深うなる儘に夢も穩かに相成り、海も熨せるが如く平かに、漸く冬の範圍を脱し候て、御尋ねの桃

同　返辭

御書に先んぜられて汗顔の至り。

○桃花は咲かずやとの御尋れ。

○御馴染の桃は、未だ村隱すまでに咲き亂れず候も。

○桃は兎も角、醉ふには御不足あるまじき村の春に候へば。

花は今し四分の春色、一雨だに經ば十分に開き、島は彩の霞に包まれ、數ふるばかりの家も見えず、聞ゆるものは鷄犬の聲の漏れ來るのみにて候はん。然れど、世の萬事は常に十分なるを忌み候へば、一日も早く御舟浮け吾が島へ向けて漕ぎ給へ、錦纜繋ぐ花は枝を磯に垂れて君を待つが有り、御夢は夜毎の樣に波に漂うて來る由に候へば、島の御勝手疾く知り給はんも、成らば桃林を右に見て裏の港に廻り給へ、此處ぞ桃花最も多く、海に面して網干す漁家の五六戸、中に稍大にして舟板を垣に、附ける貝殼の半ば、青き苔に蝕されて光り失へるが即ち僕が住家、滿潮の頃は直に門に御棹停めらるゝに候。御書

―春―　桃は咲かずや

○島の桃は御意に入りしとや、花盛りには御迎の船仕立て申すべく候。

○不日、村は綵の霞に包まれ申すべければ、其時は來給へとの一書呈すべく候。

桃は咲けり

昨雨を經て桃は滿開天には紅霞蒸し、海には彩の波織り出し申して候。

○淋しかりし村も桃咲きて賑かに、臨時に掛茶屋も出來たるにて候。

○桃もよく、菜花もよく、麥浪もよく、村にて善からぬものは酒のみにて候。

○路は迷ひ易き村に候し、鷄犬の聲は君

き添の事は固より承知、桃花の知己たる君が爲ならば沖の仕事は花期中相休み、御船の島に近よるを朝夕磯曲に立ち、待ち奉り居るにて候ぞ。

短文

草舍御意に召して來給はんとや、御尋ねの桃は今し滿開、明日にても麥浪おし分けて訪ひ給へ。かへすがへすも御案内後れしを謝し奉り候。

桃は咲けり

長文

美文の御筆いよ〳〵御健かに、朝夕曇乾く間あるまじく、島よりも山よりも來給ふべしとの信、定めて頻繁に候はんも、吾が村にも一度歩を運びて春に醉ひ給はずや。梅には自慢なり難く候も、桃花は昔より名を得居り、而も昨今は眞盛りに之れ有り、年毎に植ゑ添へられし樹は其數を知らず、丘も畑の畦も家の垣根も桃ばかりにて、此世ながらの仙源、彩霞と麥浪と菜花と一村を飾りて繪にし、吾が拙なき筆には容易に寫し難き景色に候ぞ。他に御先約ある事に候はんも、必ず一日を吾村に遊びて暮し給へ、御資料は十分にて候はん。酒は都の君に適し申さずとも、寸ばかりの初鮎は御膳に供し申すべく候へば、一本松のほとりの石橋へ、み姿の見ゆるを待ち奉り居るに候ぞ。他のを後にし給へとは强ひ難けれど

わ導き申すべく候。

○吾家は花に埋れ候も、孤松は高く聳えてよき目標にござ候

○緩き春潮に舟流し島の桃花に纜繋ぎ給ふべく候。

夜櫻

人の心を浮立たしむる夜櫻、漸う噂高う相成り申して候

○俗と評すればとて祇園のも平野のも名高き夜櫻。

○黄金の草鞋穿かずとも、利休下駄にて訪ばるゝ新町の櫻。

○御室の花は人を埋め、平野のは人、花を埋むるとまで誰やらが評せし雑賀。

○散歩の添物とさへ思はゞ、苦情の種に

も此處なる桃花にも義理立て給はずや。如何に〳〵。

短文　年來御馴染の桃、花咲きて波に春蕉し申し候、此書御覧次第明日とも言はず、御舟の舳を吾が住む島へ向け給はれかし。僕は桃林に席設け、相待ち居るにて候。

夜櫻だより

長文　春寒しと御通信せしは、昨日の樣に存じ候ひしに、京は早くも夜櫻の噂とり〳〵、祇園も平野も景氣づき候て、既に行樂の幕を開きたるにて候。常に靜けきを愛し給ふ君には、御出遊促しかね候も、何れも名所の中に數へられ居る花に候へば、一度訪ひ給うとも決して御損に相成り申すまじく、土地に肩持つ次第に候はねども美しき雪洞點りし花下に屐移し給はゞ、柳よりも優しう垂れし枝、御顏拂ふ風情も何時しか御筆に上り申すべく候。これは祇園のに候が、平野のは雪漲し、社頭の春白く、御日記には幾枚かを黑う染めなさるべく、嵐山や御室の花は幾日かの後に遊ばし、先づ訪ひ給へかし二ケ所の夜ざくら。京都の詩の友より。

短文　だまされて來てさへ眞なりしと歌はれし、我が大阪新町廓の夜櫻、花は少なけれど、昔の全盛を偲ぶに難からず候へば、一夜

も相成り、申す間敷。

○東山の花も笑ひ初め候へば、御遊び待ち上げ候。

花だより

京都の生命は、名勝古蹟と花紅葉、櫻は今し見頃に相成り申して候。

○花あれば必ず寺院寺院あれば必ず花あ

を電車に送られて來給はずや。御嫌ひの灘の名物は、廓離れて献じ申すべく候。堺の友へ

花だより

◎其一　名所の長文

夜櫻は君待ちし甲斐もなく、散り果てゝ舊枝に上すに由なく候も、微雨に紅粧試みそめし處々の櫻、夢重ぬる儘に次第に開き、東山は申すに及ばず、み寺の塔も半ば香雲に隱れ、嵐山も今し見頃の花信にて、清き大堰川の流れも春の影漬して眞白く、遊山船の上り下りも稍しげく相成り申して候ぞ。京はすべて四時の勝に富めるに、東山。

○子で歩かるゝ夫婦哉との繁華は、一雨の後に候はんも。

○ぬからぬ本願寺詣での赤毛布連さへ日毎に入込む昨今

○嵐山のも大分人の心を狂はしめんと致すに候へば。

○嵐山の花は又格別なる眺めに候ぞ。

る中にも、花は到る處に多く候て、名勝古蹟に一しほの光彩を添ふるに候。申すまでもなく、櫻は長からぬ命に候へば、明日は遊ばん、此日曜休暇にせんなどと、一日送りに後し給はゞ、情なき風雨に散る事もありやせん、此書御手に落つると同時に直ぐ御遊びありて然るべく候燈臺下暗しの譬、生も共に御伴して彼處此處の春探り申すべく、東山や嵐山は目閉ぢて參られ申すべけれど、廣き洛中洛外、俗人輩の尋ね漏したる處も多々ござ候はん如何に二王めきし御體格とは申せ、くの字になりて臥し給はゞ、御夢結ぶには難かるまじき吾が假住居、是非に御一遊あらまほしく、月は月、雨は雨、それ相應の趣ご

○芳野の春も今し見頃にならんとする所に候へば。

○南都の名勝に兩三日暮し給はゞ。

○命長からぬ櫻、明日は明日はにて延し給はゞ今年も亦暮れ申すべければ。

○花に南朝を弔ひ給ひて、詩的の涙なそそぎ給はゞやと

ざ候はん、吳々も花に後れ給ふべからず候。

短文 歌書よりも軍書に悲しき芳野山は、奥知られぬ程の花盛り、此兩三日の中に之れ有るべく、筆携へて月前に懷古の涙そゝぎ給ふべく、豫ての御書なくともの事に候も、御返辭かたく右。上市の友より。

◎其二 吾が里の天には雲雀、地には蝶、世は早くも麗はしき詩の領と相成り申し候處、吾が里も佐保姫のみ惠み深く、少しは賑かに相成り動きて止ぬは詩興、八幡社境内は櫻咲き出で、掛茶屋も出來申し候。物の五六日も經ば花は

○少々自慢かは存じ候はねど、花は吾が里の名物に候ぞ。

○久々にて花の御案内致し申すべく。

○暮ればとて、一山越ゆれば御村。

○花下に例の筵開きて興行りたく。

○去年の樣に後れ給うては花に榮なく候へば、散らぬ内にと亂れて一天の雪を釀し、鳥居もみ社も半ば隱れ候はん。只今の處にては、子守子の影のみ見ゆるに候も、盛りには村の誰彼れ集ひ來て、取越の愉快を酒にやり申すべく眞の賞は昨今に在り申すべければ、必ず來ませよ君。梅見に參りし御禮返しと申す次第には候はねど、吾が里の櫻も近郷に又とあらばこその花所、靜けき眺めは此頃にて、雜沓のさま見て文にせんとなら五六日後、何れかを擇びて來給ふべく、御越を待ち奉るに候。

短文 咲きぬ、咲きぬ、吾が里の櫻は香雪を漲し申して候。君よ來給へ、月にまで酌まん。散りゆくまでも歌はん。草々。

櫻狩に行かばや

花見は如何にと御同遊促せばとて、遠き芳野や嵐山、さては隅田川に風流の旅せんとには非ず、是等は例によりて容易に見易き夢に預け、生は一川隔てし天神森に遊ばんとするにて候、そは只今よりにて候ぞ。年々見馴れし花に候も、今年咲けるは去年のものならず、眺めもせば相當の興湧き申すべく、殊に花の雲おし分けて絶頂の人とならん乎、大海と平野とを双眸に收め、沖走る眞帆片帆、路行く寸馬豆人、とり〴〵の畫致、相變らずの景ながら、趣向を凝さば隨分共に新しき文に寫され

長文

花見誘引

東京の春は御はじめの君、明日隅田へ御案内致し度。

○靜なる小金井へ御伴すべく。

○飛鳥山は花の外、富士と筑波と西東に望む公園。

○花は申す程になくとも、心合ひし友と遊ばゝ、其興は譬ふるに物なかるべく候

○花見を命の洗濯とするは俗人、吾等は文の資料にせばやと存じ候。

○村の花も宜しく、一日を川に舟浮けて賞したく。

同　返辭

御先導恐れ入り候も申すべく、一日半日の遊にして其得る所は尠少なるまじく、と走り書きして斯の通り。聞え洩せる事共は、雲雀の聲戴きての途上にて談り申すべく候。

短文

京は花盛の由、東山と嵐山と目的あるに非ず候も、明後の日曜休暇を電車にて往來の旅試みたく、御先約なき中にと、此書呈せるにて候。草々。十四日。

同　返辭

御書の如く、遠き名所〳〵の櫻は、見ぬ中が花に之れ有るべく、天神森行いかにも御伴致し申すべく候

櫻狩に行かばや

馴れし花とは申せ、側面より筆着けもせば、如何樣にも新しく寫され申すべく、只言ふべくして好文章得ぬは小生にて、君には御得意の筆縱横無盡に驅り立て給ひ、人の言ひ古したる事共を清新に、花の匂ひや鳥の聲、帆の影や水の光りまで、趣味津々たる詩歌や文章に上り候はん。願くは酌む事と食ふ事とは、生に許し給へや、隨分君が向ふを張り申すべく候。御使者に一足後るゝは樽と辨當の用意せん爲に候へども、五分と經ぬ間に御門に走せつけ申すべく候。拜酬。

短文　明日の京都行、一も二もなく承知の上にも承知、花のある塲所ならば、何處までも御伴致し、命の洗濯試み申すべく候。何れ早朝に御門叩かん。十五日。

短文　明日の御花見に加り難き事、筆にし難き遺憾に候處、生は不幸にも父母共の芳野行に際し、弟や妹等と伴を爭ひ、留守番の貧乏籤引當て、承知との御返辭なり難きに候。

花見の旅する友に

◎其一　京都に申せばとて甲斐なき事に候も、最も羨ましさに堪へぬは、近々花見として京都への御旅行、此身蝶にな

御誘引にまかせ。

○來年と申し候ほんか、故障起らぬに限らずと存じ。

○遊ぶ事には後れは取らぬ僕。

○夕日に舟流し、川にての花見、風流申すまでもなく。

○疎鐘の花度るまで興盡くまじと今より想はるゝに候。

○御同樣に花見の美文草したく候。

○御受け致し難きは殘念ながら。

○午後より御宅伺ふべく、其上御伴仕と。

○何事をも花下に語り申すべく、先は御返辭まで。

花見の旅する友に

憎さ程まで羨ましき

花の御旅。

○京都より大和地方へかけ、風流極る花の御旅行。

○煤烟あとに大阪出で給ばゞ、雲雀鳴く空に、東寺の塔低う霞の中より君を迎ふべく候。

○東山は到る處眺め宜しく候へば、緩々歩を運び給うて

—春—　花見の旅する友に

る事叶はゞ、御袖にとまりて御伴致したくと存じ候。名のみ聞く嵐山や御室は申すに及ばず、優しき姿の東山一帶、花に飾られて如何に美しかるべき乎。而も洛中洛外名所古蹟もて充たされ、祠宇寺觀は到る處に輪奐の美を極むるが之れ有るべく、一握の土、片隣の石にも自ら千有餘年の歴史こもり居る事に候へば、君が美文の筆迎へて、様々の懐古の念興へ申すべく、御得意只今より推せられ申すに候。君よ君、彼の地に入り給ひし後は、日記書く御筆の序に、一行にても二行にても苦しからず、今日はしかくなりしとの御通信待ち奉るにて候ぞ。近しと申せばとて旅は旅、隨分御自愛祈り奉り候。頓首。

○詩人としての御旅行、目に觸るゝの花名句に入り申すべく

○花の外、京都は詩料滿地に候へば。

○嵐山は夜景をも賞し給へや。月に立ち給ふ渡月橋、目に見るやうにて候。

○芳野の花は最も君に適當との評、文會仲間に高く。

短文

風流の御旅行、明日御出發とや、我が文壇のため賀すべきの至り、京都の花月君が才筆に上り、一層の光彩を放ち申すべく候御伴し得ざりし遺憾は、美事に書き成されし御日記拜讀の榮に預り晴し申さん哉。

◎其二　芳野に

長文

文に長じ歴史好ませ給ふ君には、一たび御實行なくては叶ひ難き芳野の御旅、そが明日に迫れるを最も嬉しく思ふ僕にござ候。世の人の花を說くもの、只目を樂しますに過ぎず候も、君は同じ目ながら懐古の涙を主とし給ふこと、などて今更稱揚すべき、寧ろ當然とは存

—春—　花見の旅する友に

○奈良は申すに及ばず、多武峰にも迂回試み給ふべく。

○南朝の遺蹟、匂ひ床しき御筆に上り申すべく。

○酒は微酔を買ふに止め、詩文は十二分に望ましく候。

○花は咲きて君を待たん、一刻をも後し給ふべからず。

花見の旅する友に

じ候も、人格の貴き點、日來執り給ふ筆の莊重なる點、實に今度の御遊にても知られ轉床しく候ぞ。山の模樣は夢にさへ遊ばぬ身の知るに由なく候も、花は天地に漲り申すべく、香に酔はゞ苔清水掬びて醒し給へや。御參考としては、正確なる地理書御携への事と存じ候も、活きたる里人の案内に如かざるべく、只何事も探り漏し給はぬやうにこそ。今し花は君を待たん、一日も早く霞に迷ふ人となり給へ。敬具。

追文　同じ花にても芳野のは最貴く候へば等閑に見給ふまじく、待たるゝは如何に南朝の昔を弔ひ給ひし乎の御作にて候。不宣。

舟行誘引

花見は舟に限るにて俗人は知らぬに候よ

○花見の舟浮け度候處、御同遊如何。

○陸の花は今暫く他に預け、沖の小島巡相試みたく候。

○長江に棹して兩岸の春色を弄し、夕日の花に興じ度。

舟行に誘ふ

長文　明日の日曜休暇の終日を、多くの友は陸の春に酔はんとの事に候も、僕は波穏かなる海上に白鷗と共に眠らんと致すに候。同士は都合三人、柳の烟晴れそむる晨より、花の霞む夕まで、舟遊せばやの思ひ立ち、僕は固より文に拙なく詩にも疎く候へど、櫓執るには冴えたる腕、先づ岸に纜解くとし給へ、腕の呼吸にて舟は舳を沖の方へ向け、枝垂るゝ柳おし分けて川口に出で申すべく、此處より先は只梶さへ取らば、舟はすべるが如く潮にて送られて、坐するよりも靜かに候はん。萬一用意の

○往來の潮に舟を上下せしめ、白鷗と夢を共にするは、興如何に深かるべくや。

○春江水暖かに青山の影を波心に蘸す處に杯を擧げ。

○花曇の空に風起るとも覺えず、海は涯なき青塵。

○畫中に浮びて一日暮さばやとの遊。

樽空になりもせば、花咲く磯村に漕ぎ寄せ十分に充たし申すべく、團子は念の爲にと澤山準備ずみに候ぞ。海うち繞る青山、沖走る白帆、そは君が御詩料に不足なるまじく候。水陸何れにせよ、其歡を同じくして其方法を異にするに過ぎず、今此に是非を爭ふの要はなし、君は吾黨の人と存じ、稽古の爲に樣々の事共書き聯ね候て、御誘引致せる次第に候。

短文

明日の午後早々、柳の渡に船を艤し花の汀に漕ぎゆきなど、暖かき春の波弄ばやと學友兩三輩と思ひ立ち候に、君にも御同乘有りては如何、伺ひ上げ候。

同　返辭

僕も舟ずきと見ての御誘引。

○興に於ては甲乙有るまじきも、靜けきは舟にての觀花。

○舟も矢張り風流の屋形のもの然るべく

○陸にして頭に戴きて見る花と、舟にて水を隔てゝ見る夕暮

同　返辭

長文

春の日永に筆執り給ひし御念入の華翰、面白く拜見致して候。碧の海に舟すべらすと、塵深き路に自轉車驅ると、遊人のしげき花の土手に歩を移すと、比較し來れば御意の如く、舟遊を以て第一の風流と申すべく候酒盞きもせば磯村の花に舟繫ぐ事も、青山と白帆とを詩料として僕に取れよと申さるゝ事も、共に聊かの異存これ無く、團子の御用意も萬々謝する所に候も、只氣遣しきは餘事にもあらず、日來御鍛錬とは申せ、小さき腕の船頭に、又とかけ代のなき命預くる一點、少々不安心か

の花、優劣事新しく申すまでもなく候

○沖の小島巡、共に櫓を執り申すべく候

○群集の客、遠ざかりての花見は、御意の如く舟そ第一。

○烟る柳の岸に漕ぎ寄む花の磯に棹停め

○早朝、御屋敷の下の濱に參り、舟用意御加勢致すべく候。

と存じ候。然れども、花曇の空に風雨は望みても起るまじく、如何にも全一日を御同船願ひ上げ、潮の去來と浮沈を共にする鷗を友に、浮世の外に遊び暮し申すべく候御返辭の要は、諸の一字に過ぎずと存じ候も、君の御書が御書に候故、痩腕揮うて前後次第もなく、筆に任せて綴り得たるが是。吳々も今宵の夢は申すまでもなく、水煙深き處に落つべく候。

短文　野と山との春に飽き候ひし此頃、舟遊せんかとの御誘ひ、御連は誰かは存じ候はねど、御同乘相願ふべく、正午に家を辭し、柳の渡に參り申すべく候。

山行誘引

春遊は思ひ〳〵、僕が思ひ立ちしは山行にて候。

○花の雲おし分けて身を山上に致し。

○某城址の春を弔ひ古英雄の昔をしのび

○雲雀の聲を蹈まへて四顧の眺望をほしいまゝに致し。

山行に誘ふ

長文　行先廣き花の世界は則ち詩の領、行樂は水に在りと誘るもの、野に在りと說くもの、一々列擧しがたく候も、生等は明日早朝村を辭し、揚雲雀の聲戴きつゝ三里を歩し、某山に登らんと企て申し候。某山は取立てゝ申す程に高く候はねども、南には郡の連山重疊して積翠濃かに、北は蒼茫たる太洋を望むべく、眞に馳眺千里の絶頂、東麓には櫻花に富める古刹之れ有り、西の中腹には某氏の古城址を存し、草よりたつ蝶は武士の魂化して飛ぶかとも想はれ申すべく、其目に入るもの樣々にて、

○樹こそなけれ、眺めは界隈に比なき彼の山上。

○沖の白帆、平野を劃する碧流、みな寸眸に收まり申すべく

○近郷の春、何れも脚下に見え申すべくと存じ。

○墨繪に似たる街道の並木松、素練に似たる川、共に筆に上せて見度。

○明日は十時頃より家辭せん筈。

同　返辭

水陸の花見た避けて山行の御催し。

○眺望と懷古の料多き某山、何とて首た横にふらるべき。

○御同遊は定めて文會の友なるべく。

—春—　山行に誘ふ

詩氣を壯にするべく、酒興を深からしむべく、慨慨をして切ならしむべく、詞藻をして艶ならしむべく、一日の遊にして筆は萬化の趣を得るに難からずと、友等も期し僕も心私かに想像する所、況して我が文壇の將たる貴兄筆呼び給はゞ千景萬情自ら妙文に入り申すべく、明日の一遊に漏しては相成らぬと、斯くは御誘ひ申せるに候

短文　春を遊び暮すとは少々、机に對して義理たゝぬ樣に候も、日曜の一日位を山に送りたればとて、不勉強との誹は招き申す間敷明日の山行御伴申し上げ度、文想を養ふには至極の遊かと御都合伺ひ候。期は明後日。

同　返辭

長文　御垂示の如く、歩に任せて行き次第の春、君には朝に雲雀の聲仰ぎて聽き、正午頃は山上に立ち、三里が間戴きし聲蹈まへんとの御山行とや、實に愉快なる御催しに御座候。千景萬情を一枝の筆に驅使するは、君自らが申さるゝ語とすべく、論より證據よ、只今受けし御誘引書は、僅かに一個の某山を中心に、莊嚴なる寺院も偉大なる太洋も、起伏する連山も、爛漫たる櫻花も、英雄を偲ぶ古城址も、皆面白く書きなされたるに候はずや妙文に入り申すべくとは、竟に僕には不當の句、君に御

—春—　山行に誘ふ

○五町に足らぬ小高き山、勇ませ鼓して一番に駈け登り御覽に入るべく。

○遊記は例により、某先生へ御評仰ぐ御考に候はん。

○御示しの如く、四顧の風光謬る欺くべければ。

○御伴して共に山上に立ち申さん。

返し致すべく候。只々漏してはなるまじとの御厚意は萬謝する所にして、明日の一日を君が影に添ひ、何處までも隨行する覺悟に御座候へば、他の御同遊者には宜しく御披露願はしく候。何れ東雲白む頃、草鞋脚袴に輕々と身を固め、御門叩きて君が春眠驚かし申さん。

短文　十人十種、げにも思ひ〳〵の春遊、詞兄には山に興買はんとての御誘引、何れの方面かは知らず候も、山の遊びと聞くまゝに早くも足は動きそめ申して候。兎も角も輕裝し、明日早朝より出掛け、萬事は御宅にて承り申すべく候。

野遊誘引

艶なる春の野邊に遊び度しとの此書。

○常に馴れし景色に候も、年々に飽かぬは花柳に候はずや

○花は野に霞み、柳は水に烟り。

○芳草烟る野に半日の杖曳き、蝴蝶に伴ひ春弄したく。

野遊に誘ふ

長文　梅見の酒なほ醒めやらぬに、世は愈白花の春、紅紫とり〳〵の色に飾られ申し候とは、兄が誰やらに送る手紙の冒頭語に候ひしが、げにも天には雲雀の歌面白く、地には蝶の舞優しく、山と申す山は皆うち霞み、御寺の塔も僅かに其尖を花梢より見すのみに之れ有り、川邊は柳うち烟り、橋は其半以上隱れて見えぬに候。俗人も雅客も、浮世を外にしての逍遙ひ、此頃の野は繁華に御座候。吾々とても勉强は勉强、遊歩は遊歩、判然と區劃を立て候はゞ、春の二日三日を行樂に費したりとて、

誰れ咎むる人もあらぬ乎と存じ候。御同遊するを得んには、美文に和歌に、草を席にして陣張りたく、春遊の目的蓋し此に在り、と漢文調に申さば斯樣に理窟がつくにて候。殆ど軒を列べし君と僕、御誘ひの書作りし事、迂濶千萬の樣に候へども、其處が文の稽古と思召せ。御返辭は、矢張筆にて願はしく候よ。

短文

花紅柳綠、野べ川べ繪よりも美しき春景色、爭でか知らぬふりして過され申すべき。明日、好天氣に候はゞ、町を逃れて詩囊を肥す爲の郊遊相催し度、實に人生の行樂は此頃に如くものはあらざるべく候。

○水も山も行樂に宜しく候も、先以て野の景色に醉はゞや。

○遠近に拘らず暮れやすきは春遊のならひ、月までも厭はずと覺悟。

○花に招かれ柳に送られ、十里の野邊を股にかけんと。

○草を藉きて風流の陣布き申すべく。

同　返辭

封披かずとも知れし御書とは推し候も。

○水か山かと御書披けば、思ひは同じき野の景色に醉はんとの御誘ひ。

○目的は醉の一字に候はんも、詩も必ず漏れ申すまじく。

○半日や一日、文机

長文

春景色よりも筆致艶なる御手札、差當りて御返辭の手本にせんものと、幾度も繰返して拜見、主眼と見し處は、奥齒にて趣味の咀嚼試み申し候。常には汚れし人の世、千紫萬紅に飾り立てられ、華やかなる舞臺と相成り、滿城の士女は野に山に、綺羅の香と鞭絲の影を飜さぬはなく候。自然の景色を資料に、芳草を藉きて風流の筵張り、詩歌闘さんとの御仰に候も、未熟の弟には覺束なく、只御趣向だけ左袒し、何時にても御陪遊願ふべく候。御希望に任せ、幾度か首捻り御返辭の筆執り候も

離れたりとて、不勉強にも相成るまじくなどとは恐縮。

○此頃の景色は吾等の世界、花と言はず鳥と言はず、眺め次第に聞き次第。

○弟も共にと願ひ出で候故、伴致さすべく候へば。

○何事も野べに歩を運びつゝと。

—春—　野遊に誘ふ

聞えぬ節多かるべく、而も筆窘束して伸びず、僅かに御伴すべき事の、讀まれたるに過ぎざるべく候。

短文　同じく一日を費すべくは、君が御誘引に應じたく候も、明日は祖母を保護して西京へ參ることに相成り居り、吳々も遺憾なるは詩伴に漏るゝ一事に候。

短文　景も情も實に御書の通りにて、暫時浮世の外の人とならんと此方より、一箋飛して御同遊促さんと存じたるにて、同じ思は野邊遊、何條彼是れ異存のあるべき、尻に帆かけて御伴致すべく候。

花見に招く

櫻は滿開、破れし屋を隠す程に亂れ申して候ぞ。

○花の十分なるを待たば　或は風雨　妬む事も有りやせん。

○花は雲か雪かの眺め、吾家の物ならず候も、川隔てゝ眺めらるゝ土手の櫻。

花見に請ず

長文　吾家の櫻か、櫻によりての吾家か、とまで先年御評蒙りし古木、連日の微雨に促されて一時に綻び、家も半ば隠るゝ八分の春色、その滿開を待たば或は風に散らされやせんと存じ、明午後早々雅筵相開き、久々にて分韻試みたく、同社の諸彦へも來給へと案内致しおき候へば、詞契にも何卒駕を枉げさせられ、花に榮添ふ名句賦し賜りたく、時節柄他に御先約も如何かと存じ候へど年來の御馴染甲斐に花神も待つに候はん。酌みて吟じて興は夜に入り候とも、折柄の月に候へば一刻千金の景色

—春—　花見に請ず

○名のみの別莊に候も、花は例によりて亂れ咲き申して候。

○晴雨を論ぜず、明日の午後より小集催し度候へば。

○花を下物に、誕生祝を兼ねの小宴。

○團子も酒も用意ずみに候へば、平げ給ふ事と吸ひ給ふ事とが御越を願ふ目的。

○御來賀待つは僕のみにも候はず、花ある事忘れ給ふまじく

同　返辭

御招き有難く、晴雨を論ぜずとは興深し。火にても風にても明日は背くまじく候。

○名高き花咲き候ひし由、酒攻め詩攻め厭ふものかは。

をも妙じき御筆に上り申すべく、萬一雨なればとて夫れ相當の趣これ有る事に候へば、明日は諾との御返書戴きたく候。まだ外に書きたき事は數々に候も、そは正座に請じ候上にと、茲には省けるにて候。

短文

今は貧しき詩人の花に候も、憐れ某長者が名殘の名木、漸う雪を漲しそめ候へば御都合宜しき時、御車命じ給へや、酒も團子も用意ずみに御座候ぞ。

同　返辭

長文

此方より花の消息伺はんと存じ居りしに、心通じてか只今の御書、名高き櫻咲き亂れ候よしにて、例によりての御清集、下手の横好との譬に漏れぬ小生に候も風流の道なれば必ず參上御末席相汚し、幾度か筆執り句は成らずとも、花に月の影落すまでも諸君と酌み、御滿足させ申すべく、御書添の雨降り候とも、參上との二字決して相流し申す間敷候。

短文

長者が名殘の櫻、一たび詩人の君を得、更に香り高かるべく、如何に美しく咲き出でしかは、年々の花に偲ばれ申し候も、今年のは明日にても參上、心ゆくまで眺めたく君よ必ず一榻の半を分ち給へや。

○煙霞疾を成せるの僕、花月の御宴には外れ申すまじく候。

○餘の儀ならばいざ知らず、風流の御宴必ず陪し申すべく候

○御心やすき仲、御招き辭し申す間敷候

花見の席より一足後れての御書に候も、今に御越のなきは如何、筆戰も始まり、酒も酣ならんとするに候。

○未だ御歸宅なき乎生等は花底に陣取り將に樽を開かんとする所に候ぞ。

○今し酒三巡、君を懷ふこと切に、重ねて使者立て申し候。

○臨時に開きし花下の宴に候も。

花下の吟筵より一筆

長文

春酒かをる花見の席に筆執り申し候。今し杯一巡、詩興湧くまゝに君なきを淋しく感じ候ところ、未だ御歸宅に非ざる乎。今日の遊、前以て御知らせ致す筈なりしも、前便にも聞え上げ候如く、訪ひ來し友等に同意して急なる催し、同席の仁は皆御承知の風流三昧の徒、決して御遠慮には及び申さず、其儘御越し願はしく、久々に付、酒も詩も御相手致し候て、十二分の觀盡させ申すべけれは、花散らぬ中に一刻も早くと、蝴蝶姫に櫻の渡越えさせ、重ねて使者と致し候。草々。

短文

生等は此にて風流の陣張り、例の酒詩闘はし申し居り候。御差支なくば御出陣願はしく、何分臨時の催しにて、御誘引する遑なかりし儘、花下より飛檄此の如くに候。櫻祠の岩國屋より。

同　返辭

長文

拜見。御筆の勢にも花下の高興ほの見え、御愉快比するに物なかるべく、御同伴は大概誰と推するに難からず、駈けつけて今入り三杯戴くも憎からず候も、此方にも雅俗打ち交へての友訪ひ來り、庭前一株の櫻をだ

しに盛んに酌み居り申し候。君の御宴は、定めて月になりゆく迄と存じ候も、僕等のは月の落つる頃までも容易し撤し申すまじく、御歸途は必ず御立寄り願はしく、萬一逃げ給ふ事も有らん乎と、斥候放ちおき候へば、必ず石橋附近にて要し申すべく、吳々も總勢にて押し寄せ給ふべく、決して城壁を設けず、門を八の字形に開き、相迎へ申すべく候。急ぎ御返書まで。

短文　風流なる花の御陣よりの飛檄、喜びの胸躍らせて拜見。固より穀潰の僕、筆の敵には相成り申すまじきも、も一つの物にはと自信深く、すぐ膝栗毛に鞭當て申すべく候。

○すぐに來給ふべく席を空しくして待ち奉るに候。

同　返辭

すぐ參り、御相手致すべく候。

○今歸宅、時を移さず花の御陣へ駈けつけ申さん。

○萬一不足もやと、一樽御使者煩し候

○僕が居で一座榮えずとは、少々御花もたせに候はんも、暇故參り申すべく候。

○罰杯用意して待ち給へや、詩は成り難かるべく候ぞ。

町の友へ

町の春は、相變らず繁華に候はん。

○打絶えて御得意の

君來ずや

◎其一　町の友へ　村の友より

長文　君來ずや、と嗾かさん爲め、梅の夢繰返すは既に古臭く候はんも、桃の盛りの頃、山添のは溪流に影浸し、田圃のは麥浪に洗はれ、一村は絳霞に包まれし旨、吾筆の限を盡して御通信せしは、數ふるばかりの前日に候に、今に尙一本松の下に御姿見えで、世は櫻の頃と相成り申して候。花の景色は今更申す迄もなく、八幡社の鳥居も香雪に隱れ、青きは高き松のみ。延命寺も依然として有るべきも、遠く望めば霞に沒し候て、聞ゆるもの

筆に接せず候處、此頃を如何に暮し居給ふぞ。

○夜櫻も既に散り失せ、近郊の春は君をば待ち申すべく。

○田舍は昔に變らず靜げき春、とり〳〵に眺め宜しく候ぞ。

○菜花も盛りにて候へば、一日を詣中に逍遙ひ給はずや。

—春—　君來ずや

は流るゝ鐘の聲のみに候ぞ。君には生れ給ひし御里、春戀しう思ひ給はずや。路は昔の通りにて、追分地藏尊は不相變東を指し居るに候へば、久しく蹈ませられずとも迷ふよしも之れ無く候。町の春は格別に繁華と存じ候も御結婚後間もなき奥樣には、田舍の花珍しう眺め給ふべく、砥よりも平けぎ街道に、それよ流行のゴム輪の車並べ候ひて、途上を畫中の人となり、一泊の御豫定にて吾家を訪ひ給はずや。吾が里は則ち君が御故郷、一山越えもせば、名高き例の温泉場、二日を費し給うたりとて、決して御損には相成り申すまじく候。自分勝手の筆の樣に候も、そは君招かん心の精一杯なればこそ。頓首。

○來給へばとて、珍しき御膳はなけれど自然の景色を肴に。

○初鮎も少しはとれ申すに候。

○此頃は一軒茶屋も賑かに、茶碗も不足勝と申す景氣。

同　返辭

淡ませがらせの御書面白く拜見。

短文　御地唯一の櫻の名所、花の櫻祠も賑かに候はんも、吾が住む里は靜かにて、櫻は少なくとも花は紅塵に汚されで清く、菜花も盛りに御座候。三里は遠しと言ひ給はんも、電車ならば申すに足らぬ行程、待つは御保養がてらの御越しにて候。

◎同　返辭

村の友へ　町の友より

長文　梅にも桃にも來よとの御書有難く、厚き御心の程は、句ひ床しき墨の痕に見れ居り候も、俗に投ぜし身は何事も自由になり難く、雨には讀み、晴には耕せし昔の境遇慕はしく候。かげ口好む友等は、定めて小糠三合

—春—　君來ずや

○田舍は繪よりも美しき春とや。

○町の此頃は俗に堪へ申さず、いよよ御地の景色偲ばれ。

○吾なば引寄せんとの御筆、厚き御心も籠る墨の香。

○夜毎の夢は雲雀鳴き蝶舞ふ村に落ち。

○必ず一遊して興じたく候。

○桃花に隱るゝ御家訪ひ申すべく候。

○不日に參上、君が村の春に醉ふ人と相成り申すべく。

山の都へ

此頃は、山の春は如何に、先以て伺ひ度は其景色にて候。

○打絶え山越えて來給はざるが、雲に臥

持たば養子には行かぬがよし抔、評し合ひ候はんも其は生が敢て關せざる所、幾年かを學校に學び得し腕を磨かん爲め、商家を望みたるにて、心までは商人根性には落ち申さゞるに候。これは君にまで聞え上げずとの事に候も、御村訪ひたくも訪ひ難き事情の一つと、御容し願ひたさに筆したるに候。此頃は又、花盛につき來ずやとの御書、養家の店も閑暇にござ候儘、此次の日曜には必ず君が御書齋の人と相成り申すべく、固より將來の御交誼願はん爲め、新婦も相伴ふ筈、花より團子との譬もござ候へども、芋は第一の好物、山程蒸して待ち給ふべく、生は不相變の一杯にて宜しく候。餘は拜芝に讓る。

短文

明後幾日、命に任せて電車中の人と相成り申すべく、花は兎も角も、常に御自慢の若鮎、御手腕見せ給ふや。如何に。

◎其二 山の友へ 海の友より

長文

春は何處も同じ春に候も、城下を中に隔てし御地と此處、山と海との花や柳の趣、さては朝夕の景色、固より異なり申すに候。生は申譯もなき御無沙汰、御機嫌伺ひ旁、此方の模樣聞え上ぐべく候。

夜は小島より明けそめ、水煙消えゆく儘、上る朝日の影麗かに、沖には昨夜の夢載せて走る白帆の二つ三つ、こは申し上げずとの景に候も、東雲の頃、島の鷄と陸の

して花見に耽り給ふに候はん。

○開え上げ度は海の春景色に候も、度々筆執りたる事とて、今は寫すに資料なく

○朝夕は申すに及ばず、雨の眺めも宜しく候ぞ。

○來給はゞ、舟棹さして釣に御伴致し申すべければ。

—春—　君來ずや

鷄と、互に應へ合ふは面白きに候。

眞晝近う相成り候はんか、花曇の日和うら〳〵と、海には細波さへ起らず、潮と上下する鷗も夢穏かに、網干す垣根には、髭白き漁翁が網の綻目を繕ひつゝ、銜へし烟管落して居眠る可笑しさ、磯村なればこそにて候。

夕暮は山手の松より黑う相成るに候が、島の花は夕日に照らされて明かに、漁家は手に取らるべく近う見え、疎鐘の響き海面に流れ候へば、島もやうやう夜の景色と相成り、花は霞み柳は烟り、高きは漁歌の一曲、仲々すて難き情景、君が筆待たば、畫よりも美しう寫され候はんも、吾は善くせず候。右近況に代へ申して候。

○此春より電車も通ふ樣に相成り、城下とも往來は自由。

○同じ春ながら、趣は多少の相違。

○酒は淡くとも、君が醉はしむるには桃花も御座候。

同　返辭

委曲を盡せる芳札、詮じつむれば來よと

—春—　君來ずや

短文

正月以來、御自慢の筆絶え候處、長閑き春を如何にして、山水清き里に暮し居給ふぞ。生は夜ごと日ごと、何時も花や柳の磯に釣試み、太公望氣取り居るに候。

◎同　返辭　海の友へ　山の友より

長文

爾後の疎濶は御互に候處、とり〳〵の御書面白く拜誦致し候。御示の如く、同一の春色ながら、海と山とは多少の差はござ候。御筆に眞似する譯には候はねど僕も亦朝と晝と晩との三段に書き分け、御返辭に代へ申すべく候。

一本松に宿りし鴉夢醒し、一聲鳴きて此方へ渡れば星

の二字。

○御磯の春も繪に勝るに候はんも、山村は詩も及ばぬ景色。

○僕より訪はんも先輩に對する禮なるべけれど。

○互に里の自慢の書に、陽春脚ありとの譬、終に花老い申すべければ。

○先づ君より訪ひ給はずや、御歸りには御見送り致すべく。

○驚に後れし身恥かしく候も、必ず御磯の桃訪ひ申すべく候

彌生の頃都の友へ

御見舞かたぐ、村の春聞え上ぐべきに候。さても、

○花は紅に柳はみどり、去年に同じき

—春—　君來ずや

消えて青山淡く、草籠負ふ牧童は學校出前の仕事に、麥笛吹きて石橋渡るが見え、夜の明けそめし櫻は花いよいよ白う、朝日に匂ふにて候よ。

今朝より鳴きづめの雲雀の歌もやみ、耕夫も鍬の手休めて煙草輪に吹く頃、草屋の背戸に架れる水車は緩う廻りて、幾度か流れ來る落花を受けて又零し、零して又受くる頃は、御書に見ゆる漁翁が居眠る時に候はん。

夕日に暮れ殘る花は、御地に變らぬに候も、四面の山色紫に、疎鐘流れて憐れなるは、霞む磯曲の漁唱よ情景何れか勝れる、僕のよりも君が筆欲しきに候ぞ。土鍬洗ふ水溜に、映る三日月の影も宜しく候。

短文

御書に接し恐縮、谷の戸出でし鶯は都の旅終へ、明日にも歸らんとする此頃、僕は今の御村にさへ出づるを得ず、此上もなき遺憾、閑を偷み候て近々御磯の春に醉はん筈御所有の生洲賑はしおき給へや。

彌生の頃都の友へ

長文

去年に同じき村の春に候も、君いまさねば轉淋しく、舟遊も山行も以前の樣に盛んに行はれ申さず、文會は廢絶同樣、會員は散々に相成り候も、其多くは遊學の爲め、御承知の如く某君は御地に、某君は大阪に、某

春に候も。

○靜けきは十戸に足らぬ山村の花、雨には一しほに候よ。

○古くさき語ながら僕は晴耕雨讀相變らずの境遇。

○君おはされば花も柳も淋しき眺め。

○舟遊も山行も、僅かに一度宛こゝろみ申し候位。

君は兵役に、某君は師範校に、某君は他郡の小學校に、殘れるは某君と生とのみに之れ有り候。同じく廢れたりと申しても、善き方の爲に廢れしに候へば、他日は再び復興の事と樂しみ居るに御座候。

昨日は農事の骨休めに、名ばかりの花見催し、御馴染の古城址に遊び申し候。櫻は眞盛りに之れ有り、首塚の邊の松も殆ど隱れ、風にも白う影あるは花片の飛ぶに知れ、そが杯心に點ずれば、向ふの隅へ吹き付けて呑み乾すなど、前年の春に異ならざりしに候。

遙かなる海を山の凹より眺め候ひては、君と共に曾て立ち、白帆の幾つ通るかを終日數へたるなど、不圖思ひ

○馴れ給ひし故郷の春と初めての都の春とを比較し給ひしならん、是非如何に。

○名ばかりの村の公園、兒守子のよき日暮し場所。

○聞きたきは京都の春げしき。

○妙じき誹に物されし、東都の春うち待たれ申すに候。

出でしは、是も亦前年の春の事にて候ひき。醉うて芳草を籍きて臥し、懷古の夢迚るとき、陽炎燃ゆる邊に蝶の飛ぶは、英雄未死の魂かとも疑はれ、御名作も坐ろ口に上り申し候。今年は舟遊試みる由もなく、此儘に春暮るべき乎と存じ候。さるにても、御遊學地の都の春は如何に、御讀書何かの餘暇に、筆執り給ふ御序もご座候はゞ花の景色承りたく候。書けばとて盡し難き情や景、故郷は只々、不相變の太古の春と思召せかし。

短文

花や柳に飾られし春の漁村、前年に劣らざるの風景、變りしものは君と共に船を浮べざると、美人およしが嫁入したる事に候

同　返辭

御約束に後れ、今に至るまで、東京の春聞え上げず。

○都の繁華、花の此頃殊に甚しく。

○村と都と同一に論ず可らず候も、眞の眺めは靜けき花に存すべく、賑かきは俗かと存じ候。

同　返辭

長文

古城址に御花見の事を中心に、樣々の情や景とりくに、妙じき御筆の綾に織り成され、故郷の春いと懷かしく拜見致し候。文會のすたりしは、御互に歎ずべき事に候も、會員の散せし事も悲しき一つに候も、御書の如く何れも善き事にて故郷離れたれば、他方面より觀れば喜ぶべき儀と存じ候。さて、

東都の春は如何にと問はせ給ふか、花の雲鐘は上野か淺草かとの句の如く、上野淺草の兩公園、少し離れては隅田川、素通りの遊び試み、花よりも花に見らるゝ人の多

○十年以上筆執りし故郷、紀行は數ふる計の文、然れど都には資料乏しからず

○市の内外に一日遊ばゝ、日記帳は黑う成り易く候。

○僕には初めての東京に候へば、花は他の人より珍しく。

○花は矢張り西京にて候はん。

きに驚き申し候。併し、此雜沓が花見の價値と申すべく候。王子の飛日山公園にも遊び申し候。此處は隅田と同じく古來花の名所、元文年間幕府の命により移植したるものゝ由にて、山上は眺望快濶、西に富士の秀色を仰ぎ東北に筑波の双尖を望み、北效第一の勝區と評すべく候小金井の櫻は、不幸にして一遊果さず候も、多摩川上水の兩岸、凡一里餘の間は花のみに之れ有り、香雲彌漫流水を挾み、別に一天地をなす由にて、武藏野の中央に候へば四望平衍、西北には富士秩父の連山を望み、風光佳に、小金井橋の畔には、櫻花碑建てるとか、來年は必ず其碑文を讀む客とならばやと存じ候。

○祇園の夜櫻に行樂の幕開き。

○嵐山の櫻は雨にも月にも風情多く、眞晝は人出多き爲め嬉しからず候。

○清水は東山の見仕舞とも申すべく、靜けきが宜しく候。

○とりぐの興は此に添へし日記抄に御尋ね願はしく候。

—春—　彌生の頃都の友へ

都の春の消息は、右の外まだ〳〵聞え上げたき事多く折に觸れての感興もかず〳〵御座候。是等は皆日記に收めおき候得ば、近日の内その面白しと自信するもののみ抄出、御覽に入れ申すべく、此度は心に浮び候事ばかり筆假り、不十分ながら御返辭に代へんと、此の如くに御座候。草々不盡。

短文　御書拜見。都の春もなか〳〵賑やかに御座候へども、煙處は柳、霞處は花、繪よりも美しく江上に暈し出されたる故郷の春、千里の遠きを厭はず、容易に夢に入るにて候與作へ御會の時は、目出度と御傳聲を乞ふ。

壯丹の頃友に

人を狂せしめし百花は憐れ一夜の夢。

○名ばかりの花壇に候も、牡丹は例によりて咲きそめ候。

○百花に殿して千嬌萬態。

○今年は上出來にて花の大さは斗の如きに候。

壯丹の頃友に

長文　百花に魁する梅は、吾が山本の里に乏しく候も群芳に殿する牡丹はお手の物、一町餘を歩さば洛陽の名種を移せる、美しき園に達せらるゝに候。芍藥は妖なるも格なく、芙蓉は情少なく、惟牡丹は眞に國色と誰かゞ評せし如く、もと野人の手に育ちしものに候も　申す迄もなき傾城の姝、神彩は人を射り、風度れば流霞波を爲し、露を帶びては蒼苔を照し、雨降らば一層の嬌態、語らぬが恨と申す人も之れ有り候はんも、其處に深き趣は存し申すべく、君來給うて名句賦したらば、あながち語

—春—　壯丹の頃友に

○梅見し御禮にと申す譯ならねど。

○花の白きが殊に御目にとまり申すべく候へば。

○流石に牡丹の名所花ばとり〴〵に咲き申し候へば。

○御夫婦連にて御越し願はしく。

○君が爲には手折るを吝むまじく候。

—春—　牡丹の頃友に

なきにも限らず候へば、盛りの過ぎぬ近日を期し、御夫婦もろとも御尋ね願はしく候。花の頃は怠らずに御案内いたし候も、未だ一度も吾が門叩き給はず、此頃は電車も開通の事とて、花の見ゆる處に停留場設けられ、坐して眺むるも同樣に御座候。牡丹のみにて興薄しとならば寶塚温泉へも御案内致すべく、中山寺花後の眺めも亦眼を洗ふに宜しく候ぞ。吳々も御返辭を要せず。明後日の日曜には、必ず御越下さる事にして待ち奉るに候。

短文

年毎に來給へと申し上げ候ひし牡丹今年も亦盛りに候ぞ。半日にて往來優なる便利、一度は花に義理立て給ふべく候。

晩春だより

○三春の行樂早くも夢今し跡形もなく候

○花に醉ひし酒痕は今に尙衣上に殘り居候も。

○君が御歸りを待ちし花、終に野末の塵と相成れるに候。

○落花芳草の感一しほ深きに候よ。

晩春の頃旅の友に

長文

年々同じ事を繰返すに候も、げに老い易きは花に候もの哉、げに暮れ易きは春に候もの哉、人を艶麗なる詩の領に逍遙はせし九旬、今し夢とならんとするにて候よ。千紫萬紅多くは野路の塵と相成り、曾て畫舫繫ぎし柳は綠烟り候も、客招きし酒屋の旗は低れて影を飜さず、漁翁空しく釣竿を横ふのみにて候。

床に活けし牡丹崩るゝ書齋には、晝の雨細うして香烟直く立ち騰り、半以上はうね〳〵と篆字を宙に描き、末は夢と消えて跡なきは、人の春のはかなきを悟れとの風

—春—　晩春の頃旅の友に

○絲よりも細く降る雨、人なつ懐ふの愁に和して憐れに。

○鶯鳴き老いて山村寂寞言ふに忍びず。

○花よ鳥よと人に謠はれし都も、老いては跡なき春の影。

○今頃は、君よ何處に如何にして乎、と夢に入り易く。

○御旅は風流とは申せ、故郷の影夜毎の御枕に上り申べく

○花に隠れし鎭守社は、今し青葉に埋れしに候。

○花の香染みし御旅衣、早く故郷に歸りて新綠に洗ひ給へや

同　返辭

留置の御書は、某局にて落手致し候。

情、ほの見ゆるにて候。今まで讀み居りし書とぢて指折り候へば、吾が十八の春も花と共に老いたるに候。君よ聞け、花に來年ありて咲き匂ひ候はんも、今年の花爭でか再び舊枝に上り申すべき。人の年も亦爭でか後に返り申すべき。春を傷むの恨は、あはれ絲よりも亂れ候て、門前の垂柳に繰返さるゝにて候よ。故郷にしても猶且つ然り、君は天涯に如何にして、逝く春をば送り給ふぞや承りたく候。さらば。

短文

吾が里は春暮れんとして淋しく候。花の都と謠はれし御地も亦、春の影稀なるべく、御近狀承りたく候よ。故郷の友より。

同　返辭

長文

僕が旅の暮春を如何にと問ひ給ふ乎、聊か聞え上ぐべく候。只筆の足らぬ處は、しかゝと御推察願ふは、何時も相變らずの事に御座候。

よしあし繁き浪花津に、咲くや此花の旅衣、まだ脫ぎやらずして旅の空に、初時鳥聞く身と相成り申して候ぞ吉野の花に懷古の涙灑ぎ候ひしも、嵐山の雨に小酌の興買ひ候ひしも、今し夢と消えて跡形も乏れ無く、來方偲ぶ客舍の窓淋しく候て、絹絲よりも細う降る雨、白く灑いて亂れも致さず候も、徒に吾が郷愁を千々に織成すさ

○花までとは思はざりし旅、其花の散るまで猶歸り得ず。

○今日は五里、昨日は四里、急がぬ繪筆執る旅ながら。

○花に眠りしも夢にて候ひき。蝶に伴ひしも亦夢にて候ひき

○夢馳せるは海山隔てし故郷の空に候も今し自由になり難く

—春—　晚春の旅頃の友に

ま、餘りに風流にして憎く候。さるにても、あたり眩き銀燭を綺寮に燒き候て、尙も春を樂しむ公達おはし候はんも、青葉隱に花傷む時鳥の、血に鳴くを憐む人は、世に幾人かある。そは吾れ一人かとまで嘆ぜらるゝにて候ぞや。

眞の遊覽は、風土を記して敎化を助け、花月を吟じては唱歌に入るゝに候はんも、生花の筆なき吾には能はず南船北馬の夢の痕、老の追懷にと思ひ候ひしも、其旅の日記さへ半ば白く、名勝古蹟のかず〳〵、さては山光水色さへ留めず、空しく老いし五歲の旅、今し淀川の邊に立ち、流れて返らぬ水に逝く春を送るに候が、切なる心の程を、君は千里を隔てゝ知り給ふ乎。强ひて酌む一杯の酒に、愁の眉を暫し伸べ候も、更に解けぬ思は柳絲よりも甚しきが有るにて候ぞ。

申すも甲斐なき事ながら。故郷の春は尙吾を待つある乎、そは非ざるべく候。暮るゝに遲かりし櫻ヶ岡、花は一夜の雨に散り失せ候ひて青葉しげく、鎭守稻荷の朱の鳥居は夜深く隱れ、一年の旅終へて歸途に就きたる晚鶯の聲は、何處からともなく流れて聞え候はん。彼の新田堤には水肥え候て、芳草うち烟るそが下には、劍とも見ゆる蘆の芽の二三寸、紅蟹の這ふあたり、菜花黃金の幾片を流しゆく小川には、香魚勇ましく跳ねて、夕月淡き

○四百里以外の客舍に、春を傷むの遊子と相成り居るに候。

○情緖もて織成されし綾錦にまさる御書に接し。

○窓外には落花の雨細うして、枕上の疎燈は故郷の影を殘すに候。

○山の春、水の春、旅から旅のさまよひ

—春—　晚春の頃旅い友に

に、酔ふこと稀に暮したるに候。

○詩なくして暮したる都の三春、さも幸少なきよ吾筆。

○相逢ふよりも文ば情深きものに候も筆の花匂はぬ吾書は思ひもよらず。

○久々の御返辭に代へんと、由なき事まで筆に上せたるに候

に候はん。花下に君と酌みし事、柳の絲おし分けて舟浮けし事、蝶に伴うて摘草せし幼時代の事、雲雀の聲蹈まへて山上に立ちし事、昔の遊興とり〳〵、夢に入りて明かなるは申す迄も之れなく、醒めて後も尚殘燈にその影殘るに御座候。書けばとて何とて、有りし事、思ふ事の一々を盡され申すべき。蟬の聲暑苦しくなる前には、必ず故郷の土蹈まん考に候へば、清水涌くほとりに榻横へ筆の足らざりし處を語り盡し申すべく候。右御返辭にと

短文　隅田の花にさへ、心浮立たざりし僕春暮れんとしては最ど故郷慕はしく候。只御安心願ひ度は、達者との二字にて候。拜酬。

夏の贈答

其一　都の友へ　故郷の友より

故郷の友よ
花は一夜の雨に洗はれ、村は青葉しげく相成り。
○雨後の若葉青葉一しほ瑞々しく。
○櫻は葉となり、鶯聲憐れに聞かるゝ初夏の空。

首夏の贈答

◎其一　都の友へ　故郷の友より

長文　花よ蝶よともて囃したる春の九十日、あはれ一夜の雨に老い果て候て、吾が住む村は緑清らかに、若葉青葉のいや繁ぐ、目覺むるばかりの景色と相成り申し候書けばとて、其すべてを盡すべくも非ず、先聞え上げ度は、それよ吾が書齋の庭の此頃にて候。曾て君と共に賞せし事ありし櫻、今年も雪漲して咲き、おぼろ月を宿し相變らず一刻千金の價を現じたるに候も、もと命長からぬ花、詩さへ成らぬ間に散りに散り、歸り後れし鶯は

○薫風水よりも清く吹き渡り候て、傷春の恨を洗ひ。

○新樹のみどり愈深く、吹く風も清しく相成り申して候。

○春暮れし此頃の都は如何。

○堀の水に小さき蓮葉の錢の如く浮ぶも憐れに候よ。

○新茶摘む乙女の唄田舎に興添へ申すにて、君も筆あらばと存ぜらるゝに候。

○何れも都にて買ひ難き詩趣に候はん。

同　返辭

とり〳〵の御通信面白く、清しき景色は心も眼をも洗ひ。

○先づ描かれしは御地の初夏の眺め、目に歴々たりしに候。

葉隱に鳴き、實さへ赤うなりしが多く、徐に吹き度る薫風に落ち候て、名ばかりの池に浮ぶ鯉の夢驚かすに候。此處少し日を經ば、赤き實は紫色に熟し、落ちては青き苔の上に、美しき玉を點じ申すべく候。若竹も漸う伸び破れし垣根を補ひ、芭蕉は雨毎に碧雲をしき、白き窓の帳をみどりに染めんと致すにて、天も地も夏の影ならぬはあらず候。時鳥も漏しがたき一つに候も、未だ音づれ申さず、今年は如何に鳴くべき乎、と其初音いとゞ待たるゝに候。然るにても、都の此頃は如何、筆執り給ふ御序もござ候はゞ、しかく〳〵との御書賜りたく、待つは君よりの郵便にて候。不盡。

短文

樹間に一點二點の殘花なきに非ず候も、世は早くも夏の領、見る目清しきは此頃の村にて候。御地は如何、嗾しげに候も御樣子承りたく候。

◎同　返辭　故郷の友へ　都の友より

とり〳〵の御書、面白く拜見。げに返すに由なき春の光、人の心浮きたゝしめたる、隅田の花も夢の間に葉と相成り、幾萬の都人、漸う正氣にかへりたるにて斯く申す僕も其一人なるべく御邪推あらんも、今年は病にて酒絶ち候事とて、花下に風流の陣張る詩人を學び得ざりしにて候。上野も矢張夏げしき、青葉のみどり天を

○爭はれぬ夏げしき　鉢植の柘榴も花赤う綻び申すに候。

○花と謠はれし都も春老い候て。

○ほとゝぎす喜ぶ俳人多きも、千里隔てし故郷の夢驚かすは僕一人かと。

○門前に金魚賣る聲も何となく暑苦しく聞かれ候此頃。

成し、一朝の程殊に靜かに、彌生の頃に比しもせば、全く別世界の感致され申すに候。龜井戸天神は藤の花ざかり長き房は人の頭を拂ふをかしさ、池には鯉いさましく跳るに候。鯉の事は御書にも見え候が、何れ似通ふ景色と偲ばれ申し候。返す〳〵も御書樓の此頃は、みづ〳〵しき御筆の跡により、油繪よりも美しう見られ候ひしも、野山の事ども漏し給ひしは、すべてを夢に入れよと御謎にもや、と少々不足を感じ申し候。今改めて聞え上げる迄もなく、手紙は思想を交換する第一の利器、相遇うて話するよりも嬉しみ深きものに候へば、何くれとなく御たより願はしく、此方よりも決して筆怠り申すまじく候

○御返辭にするには足らぬ都のけしき。

○是よりは、涼しき自慢の天地。

○お互に筆をたよりに思想交換すべく候

其二　山村の友へ

海村の友より

山の初夏は如何に、櫻は花散り、鶯は老いしに候はん。

○新樹烟りて碧海に

短文　郵箋拜讀。花の夢と春の酒、まだ醒めやらず候へど、都も御地と同じく爭はれぬは夏景色、町住居の小さき庭、數ふるばかりの樹も綠烟り、杜鵑の聲ほしげに御座候。

◎其二　山村の友へ　海村の友より

長文　花の衣をぬぎすてし樹々の綠、海よりも深うなれるは御地の景色に候はんも、此方は眞の海青く島も綠に、沖行く白帆の影は最も鮮かに見られ申すに候。すべて磯曲の眺めは清く、日を柳陰に避け、涼を江上に迎ふるは、間もなき事に候ぞ。御地より流れ來る川のほとりに逍遙へば、曾て桃源の春を人間に送れる落花、今し一

等しかるべく。

○海の此頃は眺め清けく、松原越に見る帆影もみどりに。

○柳のみどり漸く深く、渡は舟も半ば隠るゝに候。

○是よりは涼しき事の自慢。

○谷川の音に眞の價値は、是よりぞと存じ候。

片だに來らず、青鷺の羽ばたき靜かに、朝月淡き若葦のほとり、小鰕跳ねて波輪を作るなど、面白く候ぞ。畫も夕も詩料少なからず候も、雨には殊にけしき幽に、とても吾筆の叙景し能はざる所に候。君よ、遠くもあらぬ磯村に候へば、一日來て詩談り給へ、吾は耳傾けて聞き申すべく候。初夏の海村より。

短文　磯山寺の櫻に醉ひしは、過ぎにし春の夢、鶯も鳴き老いて青葉しげく、街道の電柱には、幾羽ともなき燕、二羽づゝ相對して何事か語るに候。御地の此頃は如何、山光水聲清けく候はん、聞かせ給はずや。

同　返辭

面白き初夏のおたより、海のさま目に見るやうに。

○御得意のけしきは實に是よりにて、山に幾倍もの興。

○花には多少賬し吾が里、春老い候ては靜かに。

○樹底に殘花の影さへなくなり。

◎同返辭　海村の友へ　山村の友より

長文　御得意の筆に寫されし、御地なる磯の初夏の眺め、青海原に浮ぶ夏の小島みどりに、白帆一しほ鮮かに見ゆるなどゝは、實に無聲の詩とも申すべく、人をして心を其境に移しめ候。吾が里に發源せる川下には、桃の花片漂ひ來ぬとや。曾ては浮世の外と誇りがに、遊び給へと君嗾せしも、春は矢張老いゆき、山には樹烟りて雲影碧に、谷には花影絶えて水聲清しく候。里遠ければ蛙の歌は聞かれず候も、靜けき眞畫を時鳥なく、憐れ深く候。是より日を重ぬるまゝに、町の人々に自慢する時節に入り候はんも、御地とて吾山村とて、心ゆくばかり

○御地の景色も夢に入りがちに候も、山の若葉の此頃。

○濤聲帆影いよよ眺めよろしかるべく初夏の海村。

○薫風青葉をすべり來る朝夕、惡しからざる山村。

○流鶯葉隱に鳴き新鶯は雲間にすぐる詩料とり〳〵に候そ

の情景、此頃に如かずと存じ候。吾に來よとや、來りて詩語れとや。柳の陰に半ば隱るゝ御書齋、夜毎に山の僕が夢に上り候も、仙源と謠はれし此處にも亦、おもひに任さぬ事多く、清しき御磯の眺めに接しがたく候。其内夏たけ、麓の清水に價値出づる頃にも相成らば、必ず山越え君を訪ふべく候。右御返辭に代へて一筆。

短文

新綠は到る處に目を洗ひ、春に醉ひし酒を醒すに候が、擂鉢の底のやうなる谷村雄大なる御地の海の景色に比すべくもあらず時鳥の聲位が風流の關の山にござ候。眞夏にもならば、谷と申す眞價出で申すべき乎。

其三　旅中より

急がぬ花の旅と誇り候ひしも、何時しか春暮れ。

○山村水郭花散りて新綠深けれど、傷春の恨去らず

○旅より旅にさまよひて春盡き。

○夜な〳〵時鳥に故郷の夢破られ、幾度か枕を欹つ。

◎其三　旅中より一筆

長文

山村の花に迎へられ、水驛の柳に送られ、送られつ迎へられつし、三春を他郷に暮し、汗臭き衣を今朝清水湧く藤棚の下にぬぎ棄て申し候。指折れば、君と別れて早くも百日餘、一歩は一歩と互に隔り候て、今は山重水複、御地と此處實に三百里の上にて候。固より相見るに由なく候も、旅に馴れては心安く、夜な〳〵故郷を枕の上に描くも面白く、天神森には花後の新綠みづ〳〵しく、啼きわたる時鳥の聲も手に取るやうに之れ有り、小さき石橋斜に架る野川には、鮎の跳るも例の通りにて御得意の釣竿肩にし給ふ君がみ姿も、あり〳〵と眼前に

○あはれ、夢に預けし故郷の花にも後れ候ひて。

○薫風に吹かれて心地よき旅衣。

○衣上の酒痕消えがたく候も、春は影もあらず候。

○水の影山の色、みな夏しろく。

○君に寄せん書、藤咲く野店に筆執り。

現ずるにて候。豫ての御約束に候ひしかば、行く訪ひし名祠古刹、さては面白しと感せし事ども、時ありては繪葉書・時ありては例の即興の句染め、其日〳〵の御便に代へおき候ひし故、何も彼も御承知の事と存じ候。常に御返辭得んと願ふに候も、吾身は萍蓬に似て宿を定めずまた定め難き旅に候ひしかど、明日は踵を西にし歸途に就き申すべければ、榻を共に致し積る談の山を語り崩さん事、旬日に出でざるべく候へば、餘は其節にと〻草々

短文

又しても旅にて逢ひし時鳥、山驛の曉に聞く悲しく候。されど、今年は蟬の鳴かぬ迄に、君と相對する人と相成り申すべく候

藤の宿より

例年賞め給ひし吾家の藤花。

○寄せては返す藤波眺め清けく候處。

○すて難き風情、友呼びて雅集催し度

○花時の騒々しきに引換へ、此頃は極めて靜かに候へば。

○梅見の御禮に酬い

長文

花の眺めには貧しかりし吾家、いよ〳〵得意の天と相成り、路行く人も暫し歩を停め、よき藤の花よと見上げ申すにて、十丈の老松より垂るゝさま、紫の雲舞ひくだるかとも疑はれ、晴に雨にも趣ふかく候。庭には名のみの小池に候も、眞鯉緋鯉の跳ねつ喰ひつする、又捨て難き風情にござ候へば、明日にても今日の午後にても、只今よりにても來給ふべし。圍碁に飽かば酒酌まん遠くもあらぬ城外の此處、是非訪ひ給へや。吳々も相待ち居るにて候ぞ。

奉るに非ず候も。

○池水に影おとす樣松枝に紫雲かゝる風情、君が筆待ち名句を得たく候。

○俳友も招きおり候へば何卒。

同　返辭

今年も亦例の御宴とや、御庭の眺め如何に宜しかるべき。

短文　寄せては返す藤波、吾家の眺め可笑しく候。殊に春の形見とも申すべきは、只この藤あるのみに候へば、御越を待ち淺酌試み申すべく候。

同　返辭

長文　華墨拜誦。僕に來て、落々たる長松に紫の袖振り、春送る藤の花見よとや。如何にも參りて、碁も酒も御相手申すべけれど、詩は御免蒙りたく候。こは御書になき事に候も、君には好み給へる御道の事とて、攻められんが恐ろしさに、豫防の筆執りしに候。折角の御意、

○紫雲棚引く下に陪し、苦吟の人と相成り申すべく候。

○長き藤花の房に杯掃はせ、高堂に醉ふべく候。

○御意にまかせ、藤棚の下なる榻に座を占め申さん。

小集に請ず

強て四時の景色の自午後より御邪魔致し申すべく、何かは鯉跳ねて勇ましき音の聞ゆる御座敷にてと、拜答。

短文　明幾日、御自慢の藤花、是非見に參り申すべく、そは晴雨に拘らずと御受け致し候。吳々も御準備は無用、一瓶にて宜しく候

小集に請ず

長文　拜呈。相變らず俗人に笑はるゝ理窟にござ候も艶麗なる春は去り、清楚なる夏まゐり候中にも、市外の吾家、竹と綠樹とに圍まれ、大袈裟に申さば例の別天地杯程の池には候へども、燕とび交ふ渚には燕子花咲き

慢もせば、先以て新緑の此頃にて。

○小池には燕子花咲き、築山には源平躑躅も見頃。

○夜に入らば時鳥も名乗あげ申すべく、待つは御來駕にて候

同　返辭

君が御得意のけしきと相成りしとて。

—夏—　小集に請ず

その、酌むに不足有るまじく存じ、明日早朝より小宴相催したく候。雅兄には何卒御得意の詩筆携へ、他におくれず御越願はしく、池亭うち清め相待つにて候ぞ。

短文　花見の御禮に代ふる次第に候はねど吾家は躑躅の世界と相成り候に付、明日小集開かん笠、竹は隣寺のものに候も、目を洗ふに足るにて候。何卒午後早々、御來駕をと。

同　返辭

長文　風流の御宴開き給ふよしにての御招き、燕子花は微雨の池上に宜しく候に、只今の模様にては、そを實にするやも知れず、かたく〳〵樂しく相待たれ候は明日早朝よりの御會、時節柄とは申せ新緑に埋もる御家、など て紅塵犯し得べきぞ。久しく擲ちし詩筆にござ候へども必ず參上致し、苦吟の人と相成り申すべく候。餘は何事も御末席汚し候ひし上にてと、草々拜復。

短文　御書有難く、明日は必ず御宴に陪し躑躅に醉ひ、竹に目を洗ふ客となり、御興添へ申すべく候。先は御受けまで。拜答。

○差池の燕子も興添へ、御宴なかく に風流と推し。

○詩陣に臨み申すべく候、餘は酒杯手にしてと。

○只今より御盛會の程想はるゝに候。

新緑の村より

眺むれば見れば詩酒によき此頃の田舍に

長文

新緑の村より

行春の名殘とも見し藤の花、美しき夕の雨に散

候そ。

○寒からず暑からぬ四月の空、獨酌も興なき業。

○御町も花に比して靜かに、例により御句案に耽らせ給ふ事に候はんも。

○山も田も樹もみどりならぬは之れなく田舍は又格別。

○往來の燕は君を吾家へ導き申すべく

○芭蕉小暗き窓の人となり、久々にて觴詠したまはずや。

○必ず一日を君が家に醉ひ、清しき新緑に目を洗ひ申すべく先は御受けまで。

同　返辭

面白く讀みし御書に釣出され候て。

り失せ、細う流るゝ小川に黄金の色を映せし、八重山吹の姿、今は尋ぬるによしもなく候も、青草烟る堤に咲ける野茨の花は、星彩あざやかに香奇しく、春また活くるかと疑はしむるにて候。次に聞え上げたきは、里川の夕暮に候が、まだ聲なれぬ蛙鳴きそめ、何處にか杜鵑の鳴きわたる、幽趣限りなく候。螢は未だ燃えそめず、蘆の清水にも價値出で申さず候も、村の此頃は晝も夜も靜かにして、詩に深き君には最もふさはしく候へば、一日來て樣々の景色を詩に入れ給はずや。尙書き漏したるものには、新茶摘む乙女の歌、軒に巢くふ燕のさゝやき等にて御座候。

短文　新樹に烟る野山の景色は又格別、花の頃に增して眺め清く候へば、吾家に酌み傷春の殘恨消し給はずや。

同　返辭

相變らず御流暢なる御筆、眺め清き野山の景色美しう描き出され、讀みゆく儘に興湧き、參りて實地に接せずもがなの事に候も、茶摘む乙女の歌、如何に情深かるべくや、先以て聞き流しがたき一事にて候。彼の清水に價値出る頃は、町の吾家は苦熱に死なんばかりの時に候はん。その時分を待ち暫し御村の人とならんかとも

長文

○城中さへ眺め清けき昨今。

○御住居のほどをもそれと察せられ。

○花にも増して興多き事と存じ候ては仲々に。

○緑陰に榻横たへて詩語らんとや。

○新瓶香泥を銜む野路たどり、君が御門叩き申すべく。

―夏―　新緑の村より

存じ候ひしかど、新緑に汚れし眼洗へげの御書、蛙の歌時鳥の聲、さては燕の高う低う飛び交ふ影、既に美文や詩に入りし事に候はん。僕にふさはしき景とは決して當らず、君に移し贈るべき一語なるべし、と存じ候へば、御受取り願はしく候。さればとて、御厚意に背くには非ず、近日塵深き町逃れ出で、繁り合ふ夏草の露ふみ分け薫風に歩を迎へさせ、御村居訪ふべく候。

短文

賜りし郵箋拝讀。春暮れし村の此頃は、樹々のみどり肥え、静けしとや。傷春の恨は既に酒にて洗ひ候も、緑陰に詩語るは悪しからず兩三日中に伺ふべく候。

杜鵑の名所より

名所づくしの吾が里春は老い候ひしかど花は散り候ひしかど

○美しき春は夢の様に去り、葉隠に鳴く鶯も今は聽くこと成り難く候も。

○花の酒未だ醒め候はぬに、杜宇の世と相成り申せるに候

杜宇の名所より

長文

恙ありとて花に背き給ひし君よ、其後は御健康に復し給ひし乎。吾が住む里の此頃は、千紫萬紅老いて影なく、見渡す限り新緑の眺め清けく候て、御目を洗ふに宜しく候ぞ。殊に古來ほとゝぎすの名所、詠まれし和歌も少なからず、是とて名ばかりの誹は免れ申すまじく鳴けばとて、鶯のやうに右より左より、しば鳴くにも非ず候も、人懐ふ夕まぐれ、夢醒むる殘月淡き曉、只一聲漏すが憐れなるにて候。君に御越願へばとて、其夜に名乗るを保證なりがたく候も、確ならぬ處に幾多の趣味存

○君に逢ひし夢さむれば、名殘をしげに鳴きわたる一聲。

○獨り聞くさへ風流に候を、詩に深き君と共に雲間の聲を待たば。

○深更に茶煎じ候て句に耽り。

○待つは僕のみに候はざるぞ、何卒御泊りがけにてと。

すべき乎、と例の得手勝手の小理窟、御都合よき時分に御一泊のお積にて御出掛け願はしく、萬一期せし杜宇は君に背く事ありとするも、綠陰の窓に燭剪り俳談に耽りたく、小田に閑々と鳴く蛙は、多少の禪味なきに非ず候吳々も此頃の里は、花時の如く騷々しからず、極めて靜閑にござ候へば、あながち御損にも相成るまじく、御枉駕待ち奉り居るに候。筆停むれば、何處にか一聲漏し候

短文

夜な〳〵憐れに鳴きそむる時鳥、獨聞くは興なし、去年のごとく君と共に聲は何處と、雲間に眼を配りたく候へば、土曜日より來給ふべく、相待ち居るに候ぞ。

同　返辭

○古今の和歌に名を揚げし御地の時鳥。

○花に來よとの命に違へる僕。

○三春を夢に送りて高堂に醉ふを得ざりしを慰めんとてか杜宇聞きに訪へとの御手紙。

○寺に隣る吾が書樓

同　返辭

長文

情景妙じき御書、吾を招かん爲の御厚意、有難く拜見いたし候。あはれ幸薄き身は、艶なる花に心を慰むる事を得申さず、三春を塵深き巷に藥爐に親しみがちにて、詩さへ酒さへ遠かり候ひしに、今はまた杜鵑聞きに來ずやとの御意、謝するに其詞を知らざるに候。生が病は其後尙癒えやらず、不幸に泣く涙盡きぬを不審に思ふ程にござ候。花にさへ心浮立たざりし故、自然筆執る事にも不精に相成り、近況さへ御便申し上げず、恐ろしき迄の罪重ねしに候。されど、此兩三日は少しは氣分勝

—夏—　杜宇の名所より

れ、塵に埋れし硯ひき寄せたるに候、身は不自由にも致せ、御厚意と杜鵑の憐れさ、流石に心ひかれ候へば、久しく親しみし枕に留守頼み、清しき眺の御里に逍遥はん乎とも存じ候も、是とて確との御返辭にはなり難く、逸る心のたけを筆にしたると思召せ。ともかく、ぶら〳〵病に候へば、緑陰深き處の御門叩かぬにも限らず、只そが近きに有らんことを祈り居るにて候。

短文　馴染み重ねし杜宇鳴きそめしとや、御得意知るべく、句案じて筆かみしめ給ふ君が御姿、見るやうにて候ぞ。其内間を得ば御邪魔致し、茶啜る人と相成り申すべく候。

書翰詞藻

常には音づるる杜鵑今年は未だ鳴かず。

○靜けき森の眞晝にも、優しき聲に鳴き申すべく。

○支那にては悲しき聲と歌ひ、我邦の俳人などは風流なる事に取るも可笑し。

○鳴くか鳴かぬか、何もためし、待ち明す積にて參上。

端午に招く

先日は御祝儀として鯉幟有難く。

○家々にあがる鯉幟勇ましく。

○艾を軒にかけ、蘭を貯へて沐浴をなすは和漢の例。

○明日は三郎が初節句に候へば、菖蒲酒まゐらせ度候。

書翰詞藻

端午に招く

長文　先日は、太郎にと賜りし鯉幟ありがたく、其大きやかなるは實に界隈第一、薫風吹きわたる九天に、勇ましく鰭振ひ居るにて候。久しく廢れし端午の儀式、武士道の復古と共に近年は盛んに行はれ、喜ぶべきの現象にござ候。所謂香茅を結んで福壽を祈るの佳辰は、明日に御座候ところ、古例により、菖蒲の酒を琥珀の杯に盛り君に献じたく候。且つ粽もドッサリ仕入れおき候へば、御嬢樣をも御召連れ、吾家の正賓となり、太郎が前途祝し呉れ給はずや。明日小川の石橋に來ても見給へよ、御

○君よ、來て醉うて兒が前途を祝し吳れ給はずや。

○何にも致せ、古儀式の復古は喜ばしき現象、吳々も御來車待ち奉り候。

梅雨だより

其一　都の友へ

故郷の友より例年の事ながら、よくも降り暮されたる此頃の雨。

○結ぼろゝ人の心にて、伸びゆくものは竹子のみにて候。

○徒然の此頃、天涯にいます君は、如何ばかりに乎と。

○香の烟もうろほひて低く地を這ひ。

○書にも詩にも飽き詮方なき終日。

惠贈の鯉幟は、青雲に舞ひに舞ひ、君を吾家の門に導くに候はん。必ず御越しの程をと。頓首。

短文

明日は弟の初節句に候。先日、先以て未來は陸軍大將になり給へ、との一語戴きし御禮に、菖蒲酒まゐらせ度、何卒早朝より御來車待ち奉り候。敬白。

梅雨だより

◎其一　都の友へ　故郷の友より

長文

古めかしき語ながら、卯花くだすてふ五月雨、都の空も雲低う、鬱陶しさ限りなきことに候べし。打ち絶え御便なきは、例の脚氣の御氣味どもには非ざる乎。其御氣味にて、筆執り給ふに懶き君には非ざる乎。御樣子伺ひかたく、此方の事ども聊か聞え上ぐべく候。

村は相變らず小路泥深く、田は水かさ增りて溢れ、草繁き畦には、數多の蛙坐して歌ふに候が、小鮒は白き腹をあらはし、僅かに跳て田より田へ移るに候。五六日前迄は、植付け氣遣ひし人々、今日は滿面に嬉しみあふれ田植の用意最中に候へば、明日頃よりは鄙唄をかしく雨中に聞え申すべく候。

濁れる野川の岸に添うては、四手網幾張ともなく布かれ、以前に變らず賑かに御座候。川下は漸う廣く、蘆荻

○頭上の庭樹も打ち烟り候て、一寸先は黑白もわかず候。

○門前の小田には田植半ば終りて、蛙の曲、面白きに候。

○牆陰に燃えたつ柘榴の花、火よりも赤う蒼苔に映じ。

○雨はつらく候とも降られば田植なり難き田舍。

○よしなき事まで筆に上し、御見舞に代へ申して候。

同　返辭

都はから梅雨にやと噂する程の少雨に候に、御地は水盈々と田植も半ばすみしとか、目出度候。

○何處も同じく降り暮すにて。

—夏—　梅雨たより

茂りて葉毎に露の玉を綴り、小魚跳れば露は散りて波は輪を描き、彼方には鷺の片脚あげて立つなど、梅雨なればとの景色と申したく候。それよ、曾て君と別れし渡のほとり、卯花の一叢あり、傘をあげて輕く打てば、紛々と散りて道白くなること、昔に變らず候。まだ聞え上げたき事は、此に盡きず候も、筆にまかせて記し、近況如何にと右。餘は後便に讓る。

短文　梅雨の天氣ます〳〵御機嫌よろしく候や。村の此頃は分けて淋しく、一寸先は茫々たる霧の海、漏るゝは田植唄のみ、夜は折をり鳴く杜宇に無聊を破るに候。

同　返辭

御返信うれしく拜見。都の此頃は矢張空曇り候て、鬱陶しさ限りなく、何とはなしに心晴れがたく候も脚氣病は襲ひ申さず、御安心願はしく候。御地は例により降り暮し、田のもやう、川のもやう、細々と寫し給ひし御筆に、昔の事ども目に見るやうに之れ有り、讀みて卯花の件に至れば、尙更君と共に渡のほとりに立てる乎と想はれ申すに候。此方は人烟しげき市中にござ候へば、雨も割合に少なく、小さき庭の樹木うち烟る事さへ稀に、蛙の聲や田植唄は聞きたくも聞かれず、そは只御

○往來便利に出來し電車客も此頃の雨にて少なく。

○旅の空はわけて淋しく候よ。

○書けばとて心も晴れがたく候へば、先は筆とめ申し候。

○此書と共に小包に托し、新茶一鑵御隠居様へ、と奉呈いたしおき候へば。

―夏― 梅雨だより

書に偲ぶのみに候。併し梅雨と爭はれぬは、それよ苔蒸せる板塀を城とする蝸牛にて、這ひし跡には篆字を殘し今朝は昨日より二三尺高う上り居るに候。窓近き芭蕉の裏にも、同じく宿を占めたる蝸牛、そが一つころりと苔の庭に落ちたるは、何悟りたる乎と吾を笑はせたるにて候。御書に螢のもれしは如何、都にては既に夜市に賣る者之れ有り、買ひ得し一籠、夜な〳〵吾が淋しき文机を照すに候ぞ。右は筆に任せて御返辭と致し候。

短文

梅以來雨を見ず候に、御村は連日の降に田植盛りの由、賑かさ想ひやられ申すに候ぞ。

其二 近き友に

學友より

昨日も今日も降り暮し淋しさやるかた之れなく。

○五月雨の晴間なき此頃、君は如何に。

○雨は空濛として遠近の山みな暗く、梅の實は黄ばみて時々落つるも、苔深ければ音もせず。

◎其二 近き友に 學友より

吃げばとて詮なき事に候へども、よく降られたる此頃の雨に候はずや。常に訪ひ續け給ひし君、常に訪ひたりし僕、御不沙汰は五分〳〵、遠き路にもあらざるに、雨に隔てられては千里の感、空と共に心も晴れやらぬに候。村近き御住居は、早苗とる娘の鄙振おも白う聞かれ候はんも、町の吾家は淋しさ限りなく、焚く香の煙も打ちしめり候て、一たびは直く騰り、一たびは低う這ひ、慰めげなるも可笑しく候。今日は書にも飽き、詩にも飽き、落つる梅子をも數へ飽き、終には身を横にし、妹に强請れて買ひ與へたりし金魚、水晶の壺を小天地に

―夏― 梅雨だより

○點滴の音も低くゆるやかに、今日も日の影見えぬに候。

○山も野も川も狹霧に籠められ候て、恰も海に似たるの眺めにござ候。

○僕も訪ふべく候も君も來給ふべく、新茶に俳談試み。

同　返辭

憎きは此頃の天氣、結ばるゝ心を晴すによしもなし。

○御書に接して忽ち無聊を慰め。

○命の如く、軒の玉水つれ〴〵に堪へず候に、君は例によりて句に興やり。

○近さ君家も千里の感じ致すに候。

○來よ、來べしにても埒明き申すまじく

し、陣を列ねて遊ぶを見、友とまで致せる吾にて候。以上、よしなき事共書き綴り御見舞に代へ申し候。君よ君雨の絶間に訪ひ給はずや、美文談に淋しさ破り申すべく新刊の文章世界も只今手に入りたるに候ぞ。

短文

今朝は珍しう日の影見え候ひしかど午後よりは例の雨、會心の詩高吟すればとて無聊を破りがたく候。君には如何、みけしき承りたく候。不盡。

◎同　返辭　學友へ　近き友より

徒然の折柄、賜りし芳札一しほ面白く拜誦いたし候。げに憎きは此頃の天氣よ、近き友をへだてゝ千里の想ひさする事、命なくもがなに御座候。されど降らねば百姓泣かせ申すべく、御推量の通り、程近き村は田植の最中に之れ有り、水盈々の田には竹子笠の一文字、軍歌まじりの小唄をかしく、川一つ隔てゝ手に取るやうに聞ゆるに候。こは君が香焚き給ふ頃ならずば、金魚に目を慰め給ふ前後に候はん。僕も君が御住居訪ひ、御得意の文話に接し申すべけれど、君も亦訪ひ給へや、鷄のしほたれて羽蟲せゝる、氣色よき眺めにも候はねど、直に御詩料に相成るべく、天氣曇りて夜に等しければとて吾門には、雨に消えやらずして路照す燭の柘榴、赤う花咲き居るに候ぞ。

○明日は霽れなん、隱々たる輕雷彼方に去り候よ、梅雨を驅りて。

○午後小降を待ち伺ふべく候ぞ。

朝顔苗を乞ふ

今年も讀書の餘暇に培養試み度候處

○片手間にとは不熟心のやうに候も。

短文　僕も相變らずの閉口、斷梅近きを願ふ一人に候が、見やれば何時の間にやら。數多の蝸牛、芭蕉葉の表に上れるは、晴るゝ前兆と嬉しがりしに候。拜答。

長文　拜呈。去年は失敗に終りたる朝顔、今年こそは存じ候に、御餘分の苗あらば頂戴相叶ふまじくや、伺ひ上げ候。申すまでもなく、注意に注意を重ね、水やる事も培ふ事も御傳授のやうに致し、やがて美事なる花に咲かせ、君が御來駕乞ひ候て、何分の御評仰ぎ申すべく

朝顔の苗戴きよき花に咲かせたき心得。

○御餘分とて有るまじく候も、少々御分ち願ひ奉り候。

同　返辭

御書有るべしと豫知致し、澤山蒔きし事に候へば。

○良き花の苗には候はれども。

お互の自慢と御批難は、當分御預け願はしく候。

短文　先日願ひ上げおき候ひし朝顔苗。少々此者へ御渡し下され度、培養に就ては御注意の事共、怠り申すまじく候。草々。

同　返辭

何より易き御所望、吾宿にては名ある花の樣々都合五種の牽牛花の苗、差し上げ申し候。理窟めきし筆には候へども、何事も失敗は經驗の一つ、今年こそはとの御一言、美しき花に咲くべき儀に候はんも、去年の御手落は、果して何の點と御合點まゐりし乎。その點たし

○近來培養流行致し候へば、花咲かば何處よりも朝顔見に來よとの書あるべくと存じ候。培養上につきては、まだ〳〵申したき儀ございかに見出し給はぬ上は、僕に來よとの御書、覺束なき事候も、書けばとて筆に盡しがたく候へば、幾回もの御經驗が第一にて、苗作る事と苗乞ひ給ふ事と、此兩三年は根くらべ致すべく候。呵々。

○御丹誠の如何は花咲きて後にと。

○涼しき朝の花只今より相待たれ。

○御注意の事共は別紙に認め。

○吳々もよき花に咲かせ給ふべく候。

—夏—　朝顔苗を乞ふ

短文

御約束の苗、鉢その儘の物と掘り取れる物とを差し上げ申し候。御丹誠のほどは花咲きし上、御自慢拜聽仕るべく候。

短文

留守中べまゐりし御手紙、漸う只今拜見。後れながら持たせ上げ候間、よき花に咲かせ、目覺の料にし給ふべく候。

友への見舞

田舍は夕暮の散歩に價値出で候ところ、都は如何。

○金魚賣の呼聲も暑くなりしとの御通信有りしも去年の今頃に候ひしに。

○川べは漸く螢の領と相成り、石橋のほとり賑かに。

友への見舞

長文

此頃は打ち絶えし御書、如何に暮し居給ふぞや田舍は田植も疾くすみ、苗は青味を帶び候て、夕には蛙の歌おも白く、螢は出盛らんとする處にござ候。日頃いそしみ給ふ君には、暑中休暇の事、御心頭に浮ぶまじきも、いろはの友たりし吾々は、今より御歸省を相待つに候て、寄るとさはると其噂のみ致し居るに候。去年は、修學御旅行にて故郷の山水に背き給ひければ、一しほの事と推し給へや。此方よりも久々じう伺はざりし故、御見舞に代へ、斯くは一書を呈し候。不備。

—夏—　友への見舞